遠藤写真館と台湾

大谷　　正

はじめに

2018 年 12 月に行われた専修大学人文科学研究所の台湾調査に参加して、見聞を広める貴重な機会を得た。この調査を企画し、様々な旅行の手配にご尽力いただいた、人文科学研究所の担当委員と事務局に深く感謝します。

この台湾調査の直前に行われた事前研究会の際に、人文科学研究所の担当者の依頼を受けて、私は「日清戦争と台湾―九份・金瓜石金山と台南の遠藤写真館について―」と題する短い報告を行った。この報告は準備不足のまことに不十分なものであったので、台湾調査で得た貴重な見聞（台南の国立台湾歴史博物館と台北の国立台湾博物館の先住民展示が興味深く、またショックを受け、色々と考えさせられた）とその後春休み期間中に行った上記報告の補充資料調査とをあわせて、日清戦争後に仙台から台湾に移った遠藤写真館に絞って、『人文科学研究所月報』に資料紹介的な研究ノートを掲載させていただくことにした。

１．遠藤写真館とその写真帖について

仙台にあった遠藤写真館については、拙著『兵士と軍夫の日清戦争―戦場からの手紙をよむ―』（有志舎、2006 年）を執筆するための資料調査で訪れた仙台と福島の図書館に所蔵されていた、第二師団従軍写真師遠藤陸郎編『戦勝国一大紀念帖』（遠藤写真館、1895 年 11 月）と従軍写真師遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』（東京裳華房、1896 年 5 月）を閲覧することで知った。東京では陸地測量部が撮影した写真を小川一真が製版・編纂した写真帖など日清戦争関係写真帖が数種類出版されたが、地方の写真館が出版にかかわった例は殆どなかった。仙台の遠藤写真館が関係したこれら二冊の写真帖は、東京以外の写真館が出版にかかわった例外的な珍しい事例だったので、拙著でも一項目を設けて紹介し[1]、また各章の扉に上記 2 冊に掲載されていた写真からピックアップした写真を掲載した。

以上のような経緯から、台湾旅行事前研究会の際の報告「日清戦争と台湾」では、仙台の郷土史研究の必須文献である菊田定郷『仙台人名大辞書』（仙台人名大辞書刊行会、1933 年、1981 年に仙台郷土研究会内続『仙台人名大辞書』刊行会より復刻）と西村勇晴らの研究[2] を参考に、遠藤写真館について説明したが、その後の補充調査で私の報告に不十分な点を発見したので、

まずこの訂正からはじめたい。

遠藤写真館を始めた遠藤陸郎について、『仙台人名大辞書』は次のように記している。

> 写真師。仙台藩医員遠藤如幹の弟、旧名寅吉、戊辰の役額兵隊に属し函館に脱走す、仙台写真師の元祖、業を仙台立町通に開き、当時技術の精妙を以て称せらる、後ち台湾に移住し、大正三年五月六日台南に没す、享年七十、遺骨を仙台新寺町小路魯鈍院に葬る。

遠藤家は歴代藩医の家柄だったようであるが、遠藤陸郎、寛哉、誠の兄弟は医業ではなく、写真師になることで明治の新時代を生きぬこうとした。『仙台人名大辞書』の記述にある額兵隊とは、軍備の近代化が遅れていた仙台藩が鳥羽伏見の戦いの後で急遽結成した洋式軍隊で、星恂太郎が隊長、イギリス兵に倣いラシャの赤上着、黒ズボンを制服にして、最新型のスナイドル銃（底装式ライフル銃）で武装した精鋭部隊であった。仙台藩が奥羽越列藩同盟を脱して官軍に降服すると、額兵隊士は脱藩して二関源治の見国隊とともに箱館戦争を戦った[3]。遠藤陸郎は額兵隊軍楽隊長として箱館戦争に参加といわれるが、1878 年に仙台で遠藤写真館を開業し、弟の寛哉、誠も協力した。なかでも誠は「早取写真」で有名だった東京浅草の江崎礼二に師事した後、1887 年から 3 年間アメリカに渡り最新の写真技術を会得し、1889 年に彼が帰国すると仙台市内立町 5 丁目新丁角の遠藤写真館はアメリカ風に改装されたという[4]。

遠藤写真館当主の遠藤陸郎は乾版早撮写真技術を生かして、磐梯山噴火（1888 年）を噴火直後現地に入って撮影し、また宮内省の片岡利和侍従（明治天皇の寵臣、土佐勤王党出身、田中光顕宮内大臣一派）の千島列島探検（1891～1892 年）に同行して写真撮影を行った。日清戦争

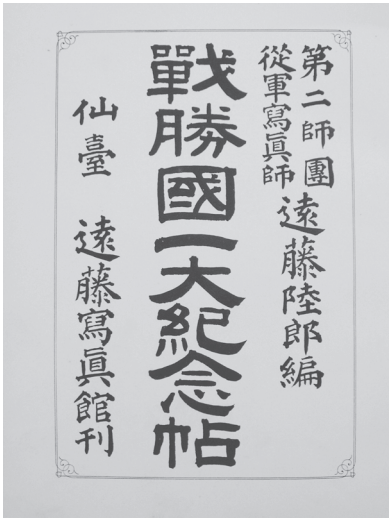


写真 1　第 2 師団従軍写真師遠藤陸郎編『戦勝国一大紀念帖』・福島県立図書館所蔵

写真 2　従軍写真師遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』・宮城教育大学付属図書館所蔵

には陸郎、寛哉、誠の三兄弟が従業員と共に仙台の第 2 師団に従軍した。

仙台の第 2 師団が山東半島作戦と冬期の遼東半島の作戦に出征した際には、遠藤陸郎、寛哉、誠および門下生（従業員、弟子という意味か）渡邊金太郎が従軍、さらに下関条約締結後に台湾の植民地戦争で苦境に陥っていた近衛師団を援助するため、1895 年から 1896 年にかけて第 2 師団が台湾に向かった際には、遠藤誠と門下生松前信次郎が台湾に向かった[5]。これらの日清戦争と台湾植民地戦争従軍の結果、前掲の遠藤陸郎編『戦勝国一大紀念帖』と遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』が編纂されて販売された。

このように華々しい活躍を見せた遠藤写真館であるが、前掲の西村勇晴の研究が示唆したように、仙台市内の他の写真館との競争に敗れたことと、第 2 師団の台湾植民地戦争経験の後、東北地域の新聞が主張した東北人の台湾進出論などの影響もあったためか、遠藤写真館は 1902 年に仙台の写真館を廃業し、陸郎と誠は台湾へ移住して台南で遠藤写真館を再興（台南市打銀街）した。その後、誠は移住直後の 1903 年 9 月 30 日に 50 歳を待たずに早逝、陸郎も 1914 年 5 月 6 日に台南で没したが、遠藤写真館はその後も昭和期までつづいた。人文科学研究所の報告では、大要以上のように述べたが、その後の調査で次の 2 点の疑問が生じた。

第一の疑問点は、『仙台人名大辞書』の遠藤陸郎の項にある「仙台藩医員遠藤如幹の弟」という記述である。同辞書には陸郎の他、遠藤恕幹、遠藤寛哉、遠藤誠の項目がある。同辞書の記述方法は、没年と享年を記し、生年を記しておらず、また当時は数え年齢で表記していると思われる。もし遠藤如幹と遠藤恕幹が同一人物の表記間違いだとすると、恕幹の生年は 1804 年頃、陸郎の生年は 1845 年頃と推定され、40 歳以上歳の離れた兄弟は考えにくいので（しかも陸郎は誠より 10 歳以上年上なので、恕幹と誠は 50 歳以上年が離れる）、陸郎が恕幹（または如幹）の弟という記述は疑問である。また、成瀬麟編『明治人名辞典』（八紘社、1913 年）には遠藤寛哉の項目があり、「安政三年」つまり 1856 年に、伊達藩藩医であった実父如寛の 8 男に生まれ、なんと姉妹兄弟 21 名であったと記されている。結局の所、『仙台人名大辞書』の陸郎は「仙台藩医員遠藤如幹の弟」という記述は誤りで、陸郎の父は藩医遠藤如寛と考えられる。

第二の疑問点は、遠藤写真館の廃業と台湾移住問題である。上記の成瀬麟編『明治人名辞典』の遠藤寛哉の項には、寛哉が「平和克復後、直に台湾に渡り、二十九年（1896）八月、台南に地を卜して写真業を開けり、三十二年（1899）、更に台北に写真館を開きて引続き今日に至り台湾第一の写真師として信用頗る篤し」とある。この記述を信じると、台湾に遠藤写真館を開いたのは弟の寛哉で、その後 1902 年に仙台の遠藤写真館を閉じて陸郎と誠の兄弟も台湾の台南に移住した。先に台湾に渡った寛哉（後に長男の克己も写真館で活躍）は台南を経て台北の遠藤写真館（台北城内府前街 3 丁目 15 番戸）で、後から渡台した陸郎と誠は台南の遠藤写真館（台南市打銀街）でそれぞれ活動した、と考えると辻褄が合う。

表１　遠藤写真館関係　写真・写真帖

番号	写真・写真帖の標題等	撮影者・著作者	発行所等	製作又は発行年月日	備考	所蔵機関	形状
1	磐梯山破裂写真説明略 二十八葉一部	宮城県仙台早取写真師遠藤陸郎製		明治21年（1888）	福島県立図書館所蔵 1~4,6~7,10~11,13~14,16~20,22~24,26~28を所蔵、この他に4枚あり 宮内庁書陵部所蔵 5,8~9,12,15,21,25	福島県立図書館デジタル・ライブラリー 宮内庁書陵部 千葉茂樹・佐藤公「宮内庁所蔵磐梯山噴火1888年の写真（Ⅱ）」（『地球科学』2009年63巻2号）。	
2	写真　千島探検諸島之実景	遠藤陸郎撮影		明治25年（1892）	片岡利和侍従は、1891年10月15日東京発、翌92年10月1日帰京	国会図書館憲政資料室	
3	戦勝国一大記念帖	第二師団従軍写真師遠藤陸郎編	仙台・遠藤写真館	明治28年（1895）11月25日	定価3円、山東作戦の状況と満州の駐屯地風景を撮影	国立国会図書館デジタルライブラリー（公開） 福島県立書館 宮城県図書館	
4	征台軍凱旋紀念帖	従軍写真師遠藤誠編	東京裳華房	明治29年（1896）5月14日	定価3円50銭、台湾の戦闘・風物と仙台の凱旋式典を撮影	宮城教育大学付属図書館 福島県立図書館 東京都立図書館	縦26cm×横18.5cm
5	蕃匪討伐記念写真帖	遠藤寛哉	遠藤写真館（台北城内府前街3丁目15番戸）	明治44年（1911）5月30日		東京都立図書館	縦26cm×横19.2cm
6	台湾蕃地写真帖	遠藤寛哉	遠藤写真館（台北城内府前街3丁目15番戸）	大正元年（1911）11月30日		国立国会図書館デジタルライブラリー（館内公開）	
7	討蕃軍隊記念写真帖	遠藤克己・柴辻誠太郎	台湾日日新報社 遠藤写真館	大正3年（1914）11月31日?		東京都立図書館	縦22.7cm×横30.4cm

遠藤写真館に関する細かな考証は以上に止め、続いて本題の遠藤写真館の残した写真・写真帖の検討に移りたい。インターネット検索を行ったうえで、実際に図書館・資料館を訪ねて確認することができた遠藤写真館の撮影した写真・写真帖は、**表 1「遠藤写真館関係写真・写真帖」**に掲載した 7 点である。所蔵機関は、国立国会図書館と同館憲政資料室、東京都立図書館、宮城県図書館、福島県立図書館と同館佐藤文庫、宮城教育大学付属図書館、宮内庁書陵部であり、この内、宮内庁書陵部以外は実際に足を運んで確認することができた[6]。本稿では台湾関係ということで、表 1 の 4、5、6、7 の 4 点の写真帖の中身を検討し、表 1 の 1〜3 の写真帖の検討は別稿に譲りたい。

２.『征台軍凱旋紀念帖』について

表 1 の 4、従軍写真師遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』はすでに述べたように、遠藤陸郎の弟遠藤誠と門下生松前信次郎が台湾に向かった第 2 師団に従軍して撮影したものを、東京の裳華房書店から発行したものである。奥付には、1896 年 5 月 11 日印刷、5 月 14 日発行、定価 3 円 50 銭、編輯兼発行者遠藤誠、発行兼印刷者芳野兵作、発売所裳華房書店および遠藤写真館、印刷所小川写真製版所支店とある。

裳華（しょうか）房書店は現在も営業している老舗の自然科学系出版社である。同店の HP には、「弊社の東京開業は明治 28 年（1895）ですが、その起源は、江戸時代における伊達藩の御用板所であった「仙台書林 裳華房」に遡ります」と記されており、裳華房は 18 世紀前半から仙台で暦、算術書を出版していた。裳華房 10 代目吉野兵作（芳野兵作）は明治半ばに上京し、1895 年 2 月 11 日、東京府日本橋区本石町三丁目十三番地（現在の東京都中央区日本橋 4 丁目 1）に合名会社裳華房を設立した[7]。仙台の遠藤写真館は従軍写真帖の出版に当たって、仙台と浅からぬ因縁があった裳華房書店に依頼したのであろう。1895 年出版の遠藤陸郎編『戦勝国一大紀念帖』と 1896 年出版の遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』の両方とも、発行兼印刷者は芳野兵作であり、これは裳華房書店出版であったことを意味する。しかし、同じ出版社から出版された日清戦争従軍写真帖であるにも拘わらず、『戦勝国一大紀念帖』に較べると『征台軍凱旋紀念帖』の写真版の仕上がりは格段に良い。その理由は、印刷所が株式会社東京築地活版製造所から当時最新の写真製版技術を有していた小川一真写真製版所に変わったためであると思われる。

『征台軍凱旋紀念帖』に掲載されている写真は、口絵部分の肖像写真 10 頁（明治天皇から始まり、台湾占領作戦に参加した近衛師団、第 2 師団[8]、第 4 師団から抽出編成された混成第 7 旅団ならびに澎湖島占領を担当した比志島支隊の関係者と、最後は清側の劉永福までの肖像写真）を除くと 92 枚で、その内容は**表 2「『征台軍凱旋紀念帖』所載写真目録」**の通りである。

続いて、第 2 師団が台湾に赴く経緯を簡単に確認した上で、『征台軍凱旋紀念帖』にどのような写真が掲載され、何を描こうとしたのかを、表 2 を見ながら検討する。

日清戦争は日本軍の優勢のなかで、1895 年 3 月 20 日から下関で日清間の講和交渉が始まり、3 月 30 日に休戦協定調印、4 月 17 日に下関条約（日清講和条約）の調印に至ったが、三国干渉の結果、条約で獲得した領土の台湾・澎湖諸島と遼東半島のうち遼東半島（金州付近を除く）を返還した。台湾に関連しては、下関で講和交渉の始まった直後の 3 月 23 日に、澎湖諸島の占領を目指す比志島支隊が上陸を開始、26 日に中心地の馬公城の占領を完了した。5 月 8 日に山東半島芝罘で批准書が交換されて下関条約が正式に成立すると、5 月末に初代台湾総督の樺山資紀海軍大将が近衛師団を率いて台湾の受け取りに向かった。日本への領土割譲に反対する清国内の諸勢力の試行錯誤の結果、台湾民主国が成立し、住民の組織する抗日義勇軍と提携して日本軍に対抗した。台湾民主国自体は短期間で崩壊したが、抗日義勇軍の激しい抵抗のため、増援部隊として第 2 師団（仙台）と第 4 師団（大阪）から抽出編成した混成第 7 旅団が台湾に送られ、兵站部も合わせるとその総兵力は 7 万 5 千人に達した。第 2 師団に関してより詳細に派遣経過を述べれば、7 月中旬から 8 月にかけて歩兵第 5 連隊と第 17 連隊を中核とする混成第 4 旅団[9] が到着した。9 月末から台南占領を目指す作戦が始まると、同混成旅団は南進軍司令部とともに基隆で乗船し、10 月 9 日以降台南北方の布袋に上陸した。これに対応して、乃木希典師団長の率いる第 2 師団主力（第 3 旅団が中心）は 10 月 11 日に台南南方の枋寮に上陸し、近衛師団、混成第 4 旅団、第 2 師団主力の三部隊が台南を包囲攻撃し、21 日に日本軍は台南に入った[10]。

以上のような台湾の作戦経過を踏まえて、『征台軍凱旋紀念帖』の写真を見てみよう。写真帖では写真が時系列的に配置されている。最初に比志島支隊の澎湖諸島占領に始まり、基隆への混成第 4 旅団到着、基隆・台北周辺の風景・建造物写真と続き、57 枚目以降 88 枚目までの台南攻撃作戦、祝捷会、現地での招魂祭の写真が続き、89 枚目と 90 枚目が東京での近衛師団凱旋と九段招魂社（靖国神社）の招魂大祭の写真、91・92 枚目が仙台における第 2 師団凱旋風景となる。

掲載写真のなかで撮影日が最も古いものが 1895 年 7 月撮影とあることから、遠藤誠と松前信次郎は混成第 4 旅団先遣隊の歩兵第 17 連隊とともに 7 月中旬に台湾に到達したと推定される。その後、彼等は混成第 4 旅団と南進軍司令部（台湾副総督の高島鞆之助陸軍中将が司令官）に従軍して布袋に上陸し台南を目指したようだ。子細に見ていくと、この写真帖掲載の全ての写真を遠藤誠と松前が撮影したわけではないようである。版権所有（陸地測量部）と記されている写真が 6 枚あるし、その他にも遠藤誠らが撮影できない写真がある。この頃、小川一真写真製版所は陸地測量部（参謀本部所属）の依頼を受けて日清戦争の写真集を発行していたので、

遠藤写真館が印刷を依頼した小川写真製版所の手許にあった写真が『征台軍凱旋紀念帖』の編集に使用されたと思われる。この結果、第2師団の活躍を中心とした台湾作戦経過が1冊の写真帖で理解できるように編集された『征台軍凱旋紀念帖』は、前年に発行された『戦勝国一大紀念帖』とあわせて見ることによって、郷土部隊第2師団を中心とした日清戦争の記憶を、仙台の人々に刻みつける役割を果たした。

３.『蕃匪討伐記念写真帖』・『台湾蕃地写真帖』・『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』について

続いて、仙台から台湾に移った遠藤写真館関係者が撮影および編集に当たった3冊の写真帖を見ていこう。これら3冊とも第5代台湾総督佐久間左馬太時代のもので、平地の中国系台湾住民による抗日運動に対する弾圧ではなく、急峻な山岳地帯に暮らす台湾先住民である「山の人」に対する武力弾圧、植民地戦争を記録したものである。本章では最初に佐久間総督時代の山岳地域の先住民に対する「理蕃政策」と先住民との植民地戦争について概観し、続いて3冊の写真帖が何を記録し、伝えようとしたものなのかを考える。

なお日本の植民地時代、先住民で日本の支配に服属した人々を熟蕃、未だに服属しなかった人々を生蕃と呼び、当時の文献も先住民を蕃人と記している。現在では不適当な用語であることを自覚しつつ、便宜的にこの用語を使用する。

1）佐久間左馬太総督と理蕃政策・先住民との戦争

台湾植民地戦争が一段落して、近衛師団と第2師団が本土に凱旋すると、台湾警備のために台湾守備混成旅団として3個旅団6歩兵連隊が設置され、台北、台中、台南に各旅団司令部が置かれた。この態勢が、樺山資紀、桂太郎、乃木希典、児玉源太郎の4人の総督の下で続いた。「土匪」と日本側が称した台湾住民の武力組織による抵抗は、第4代台湾総督児玉と民政長官後藤新平によって次第に沈静化に向かい、1902年の林少猫討伐で一段落した。この後台湾総督府は一転して、従来積極的な攻撃策を取っていなかった先住民に対する攻勢を強めるようになった[11]。

台湾駐在の日本軍が攻撃目標を中国系住民から先住民に転換しつつあった頃、1906年4月、児玉に替わって佐久間左馬太陸軍大将が第5代台湾総督に就任、佐久間はこの後、1915年5月まで在職し、9年以上という台湾総督在任記録を残した。佐久間は最初に警察本署蕃務係を蕃務課に格上げし、大津麟平を課長に任命した。佐久間は警察官と退役軍人の募集に努めて警察力を増強するとともに、台湾人の「隘勇（あいゆう）」を採用し、先住民居住地区を隘勇線（山嶺に隘路とよばれる道路を設け、その両側の樹木を伐採して射界を開き、鉄条網を敷設して電流を通した。

さらに要所には武装した隘勇を配し、山砲や臼砲を備えた砲台を築いた施設）で囲い込もうとした。警察力の増強に伴って陸軍兵力は削減された。1907 年台湾守備 3 個混成旅団は廃止され、歩兵 1 個連隊を基本とする台湾守備隊 2 個を台北と台南に置いた。

佐久間はさらに、大津麟平に五ヵ年計画理蕃事業を立案させた。これは明治 43 年度から 47 年度までの 5 年間（1910 年度から 1914 年度まで）で、「蕃人の有する銃器及弾薬全部を押収し、蕃地に永久の駐在所を設置して蕃人を統御し、利源開発の企図を擁護」せんとする計画で、先住民を非武装化するとともに、先住民居住地区内の樟脳、林産資源を日本側が収奪しようとするものであった。これに伴い、総督府内に蕃務本署、地方庁[12] に蕃務課を置き、蕃務総長に大津麟平が就任した。大津は「温柔怯懦」な「南蕃」と、「獰猛にして敵愾心盛な」る「北蕃」を二分し、前者に対しては懐柔政策を、後者に対しては威圧政策をとることを提唱した[13]。その結果、五ヵ年計画理蕃事業では台湾中部南投庁以北に居住するタイヤル族に対する攻撃が中心となった[14]。

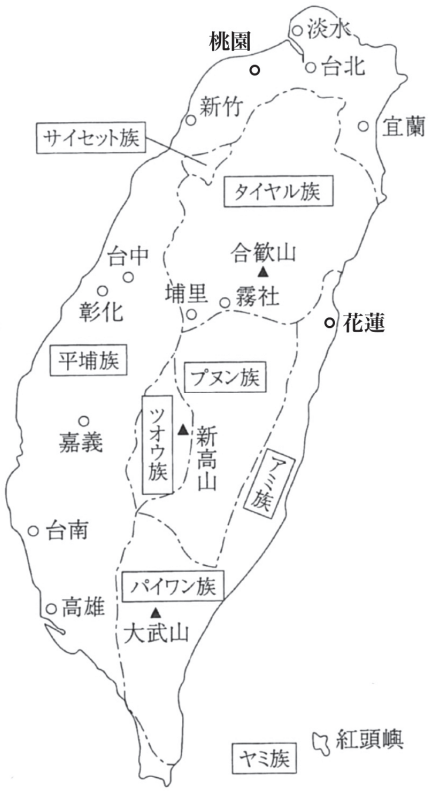


図 1　台湾原住民分布図（1937 年）　菊池一隆『台湾北部タイヤル族から見た近現代史』（集広舎、2017 年）24 頁の図 1-1 に地名を追加した。

『現代史資料・台湾 2』所収の「17 蕃人の動揺及討伐の概略」によると、1910 年度から 1914 年度までの総督府側の主な討伐行動は次の通りである[15]。

1910 年度　ガオガン蕃方面隘勇線前進／霧社方面蕃社討伐

1911 年度　北勢蕃討伐／トア社討伐／李崠山方面隘勇線前進／バイバラ方面隘勇線前進

1912 年度　ローブゴー方面隘勇線前進／白狗、マレツパ方面隘勇線前進／マリコワン方面隘勇線前進

1913 年度　キナジー方面蕃社討伐

1914 年度　太魯閣蕃討伐／南蕃銃器押収

この内、警察だけでは対応しきれず軍隊が出動したのは、1910 年度ガオガン蕃方面隘勇線前進（死傷者は警察隊、軍隊あわせて 461 名）、1913 年度キナジー方面蕃社討伐（死傷者は警察隊 215 名、軍隊 30 名）、1914 年度太魯閣蕃討伐（死傷者は警察隊 138 名、軍隊 226 名）の 3 度であった。死傷者数、死者数、戦闘死と病死の割合、死傷者の範囲（動員した台湾人人夫の死傷を含めるや否や）などは依拠する資料によって違うが、1910 年度ガオガン蕃方面隘勇線前進と 1914 年度太魯閣蕃討伐の 2 件の戦闘規模が大きかったことが分かる。

2）台北の遠藤写真館と先住民との戦争を記録した写真帖

前節では、五ヵ年計画理蕃事業を中心とする佐久間総督時代の理蕃事業の概要と台湾における陸軍部隊の変化について確認した。その上で、①『蕃匪討伐記念写真帖』(1911 年 5 月発行)、②『台湾蕃地写真帖』(1912 年 11 月発行)、③『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』(1914 年 11 月発行）の 3 冊の内容を見ていこう。

①と②は著作者兼発行者が台北城内庁前街 3 丁目 15 番戸の遠藤寛哉である。そして、①については印刷者・印刷所ともに遠藤寛哉、②については印刷者が東京神田区鍛冶町 26 番地の精美堂（森恒栄）[16] である。③は著作者兼発行者が柴辻誠太郎と遠藤克己（遠藤寛哉の長男、遠藤写真館の後継者）の 2 人、印刷者が柴辻、印刷所が台湾日日新報社、発行所が台湾日日新報社と遠藤写真館である。詳しい考証は後日に譲らざるを得ないが、3 冊とも台北の遠藤写真館（寛哉、克己父子）が写真撮影を担当し、発行にも拘わっていることは間違いない。奥付には定価の表示がないが、奥付の表示から①と③は市販されたと思われる。

次ぎに 3 冊の写真帖の掲載写真の標題・キャプションを目録化した、**表 3「『蕃匪討伐記念写真帖』所載写真目録」**、**表 4「『台湾蕃地写真帖』所載写真目録」**、**表 5「『討蕃軍隊記念写真帖』所載写真目録」**を見ていただきたい。

表 3 と表 5 の掲載写真を文献資料と対照して検討した結果、①『蕃匪討伐記念写真帖』は 1910 年度ガオガン蕃方面隘勇線前進の際の台湾第 1 守備隊を中心とする軍隊の行動と戦闘の記録で

あること、③『討蕃軍隊記念写真帖』は 1914 年度太魯閣蕃討伐の際の台湾第一守備隊・第二守備隊の行動と戦闘の記録であることが確認された。

これに対して、表 4 の掲載写真を同じように文献資料とつきあわせて検討すると、②『台湾蕃地写真帖』は、台湾総督府蕃務本署が中心となって実施した、1908 年から 1912 年までの 5 年間の理蕃事業の記録であることが分かる。従って、隘勇線前進時や討伐作戦時の戦闘行動の記録が過半を占めるものの、その場合でも警察官の行動・戦闘の記録が中心となる。また戦闘記録だけでなく、台湾各庁の蕃産物交換所、先住民子女に対する教育事業、先住民に対する農業、手工業などの授産事業を記録した写真もある程度の割合で存在する。また印刷所として当時最も技術の高かった精美堂を利用しているので、写真版の仕上がりが良く、写真の他にスケッチやイラストを交えた凝った作りをしている。キャプションについても、日本語と英語の 2 ヵ国語表記であり、日本の読者だけでなく外国人の視線を気にしていることが分かる。印刷部数の記録が見つからないが、この写真帖についてはかなり多くの部数が作成され、国内外に配布されたと想像される。

重複を恐れず 3 冊の写真帖の性格を再度確認すると、次のように言えるであろう。

①・③の写真帖は台湾守備隊の依頼で制作され、②の写真帖は台湾総督府蕃務本署が依頼して制作されたという具合に、制作主体が異なっている。その結果、写真帖の内容も、①・③は陸軍の台湾守備隊による戦闘行動の記録、②は台湾総督府蕃務本署を中心とする理蕃事業の記録という様に、重点の置き方と内容に差異が生じた。

最後に、台湾守備隊の戦闘記録という共通した性格を持つ写真帖①と③を比較して、理蕃政策の進展とともに、原住民に対する軍事行動がどのように変化したのかを検討したい。

①の『蕃匪討伐記念写真帖』は、1910 年のガオガン蕃に対する討伐作戦を撮影したものである。この討伐作戦は、宜蘭から宜蘭濁水溪に沿って、南投庁埔里支庁管内のシカヤウ、サラマカに通じる道路（宜蘭から霧社、埔里まで、台湾北部から台湾中部まで「蕃界」横切る道路の一部）を造成していた宜蘭庁の道路開鑿隊を、桃園庁管内から山を越えてガオガン蕃が襲撃したことが一つのきっかけとなった。桃園庁管内のガオガン蕃はタイヤル族の大部族で、新竹庁管内のキナジー蕃、マリコワン蕃と連絡して抵抗した。新竹庁は庁長以下 1255 名の前進隊を組織、宜蘭庁も同じく庁長以下 1814 名の前進隊を組織し、5 月から前進を始めたが、宜蘭庁前進隊がボンボン山の一部を占領して防禦工事中、強力なガオガン蕃の攻撃を受けたため、急遽、台湾守備隊から歩兵 1 個連隊・砲兵 1 個中隊の支援を受けることになった。また桃園庁は 1200 名の前進隊を庁長が率いて 9 月始めに前進を始め、9 月中旬、3 庁の前進隊が連絡することができた。この討伐作戦は、新竹・宜蘭・桃園各庁の前進隊 4000 名以上と上記軍隊を動員した大規模作戦であり、死傷者の約半数が軍隊の死傷者であることから、途中から警察隊の手に負え

ず、台湾守備隊が前面に出て戦闘を行ったことが分かる。

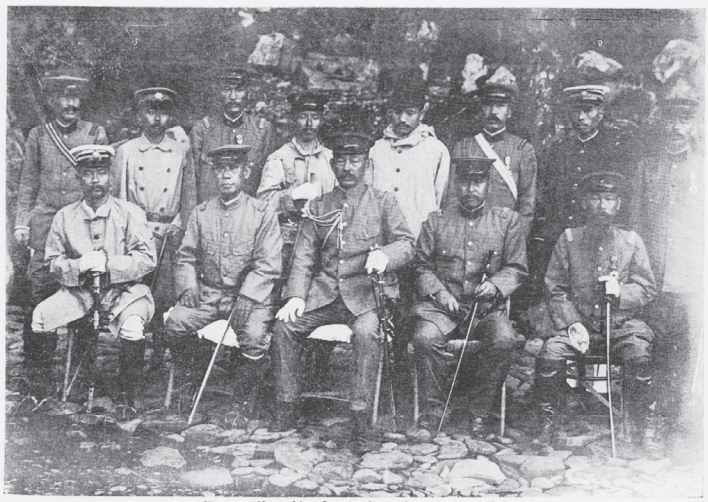


写真３　円山に於ける侍従武官長中村（覚）中将ー行ー中央が中村侍従武官長ー
『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵

写真４　漆崎山我軍の掩堡―樹木の横へるは占領後我守備隊の堡塁胸牆にして、空瓶の吊しあるは敵の接近を予察せんが為なり―
『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵

（中撃砲社蕃）地陣兵砲ルヶ於ニ頂山「ンボンボ」

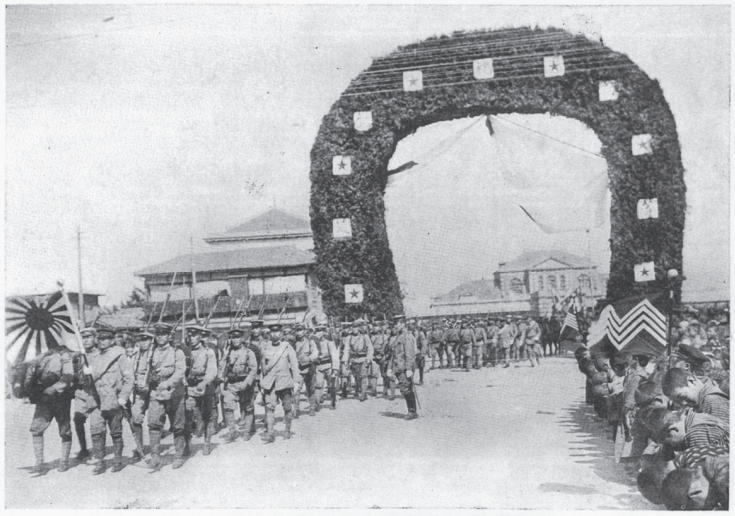
写真５　「ボンボン」山頂に於ける砲兵陣地（蕃社砲撃中）
『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵

景光ノ撃射蕃敵リヨ地陣ノ隊中澤松ルヶ於ニ腹山「クレナシ」

写真６　「シナレク」山腹に於ける松沢中隊の陣地より敵蕃射撃の光景
『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵

歸順セル「ガオガン」蕃臺北觀光歸途角板山ニ於テ夕食ノ景

写真７　帰順せる「ガオガン」蕃台北観光帰途角板山に於いて夕食の図
『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵



凱旋部隊臺北驛ヲ出テ屯營ニ向フ

写真８　凱旋部隊台北駅を出て屯営に向ふ　『蕃匪討伐記念帖』所収・東京都立図書館所蔵

戦闘の様子は、当初は至近距離での銃撃戦と先住民側のゲリラ攻撃が繰り返され、日本側に多大な被害が生じた。戦況が日本側有利に傾くと、守備隊側は尾根筋に設けた砲兵陣地からの谷を隔てた蕃社（先住民の村落）への砲撃と、占領した村落の焼夷を組合せた戦法を実施し、戦闘員のみならず女性や子供も無差別に殺害して、先住民側の降服（帰順）を促した。写真帖の写真から以上のような戦闘の実態がうかがわれる。作戦は5月に始まり11月下旬まで、6ヶ月以上を要した[17]。

③の『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』は、1914年の太魯閣（タロコ）蕃討伐を撮影したものである。この太魯閣蕃討伐は五ヵ年計画理蕃事業の最終段階の作戦で、東海岸の花蓮から中央山脈にかけて居住する凡そ9000人の太魯閣蕃（当時はタイヤル族に分類されており、戦闘員となる壮丁は3000名程度）に対する討伐作戦であった。総督府側は従来の経験から、通訳養成、通信機関整備、軽便鉄道と道路の整備、糧食運搬などの入念な準備を行ったうえで、内田嘉吉民政長官を討伐警察隊総指揮官、警視総長を副指揮官とし、合計3127名の部隊を組織して、海岸から山岳部に向けて前進した。一方、台湾守備隊は第1守備隊と第2守備隊が共同して、西側の埔里から中央山脈の合歓山と苛萊山に至り、山上から谷筋に向けて軍を進めた。この時も戦闘の主導権は台湾守備隊が掌握し、被害も警察隊より軍隊の方が多かった。台湾守備隊側は兵士数と兵器の優位を利用して、無理押しを避けて無用な被害を回避しつつ、先住民側に圧力をかけた。先住民側はしばしばゲリラ戦で守備隊側に打撃を与えたが、守備隊側は尾根筋に砲台を設置して遠距離から山砲や臼砲で先住民の村落を砲撃するとともに、占領した村落の焼夷

写真9　「サカヘン」社水源地より同社蕃屋焼打の遠望
『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』所収・東京都立図書館所蔵

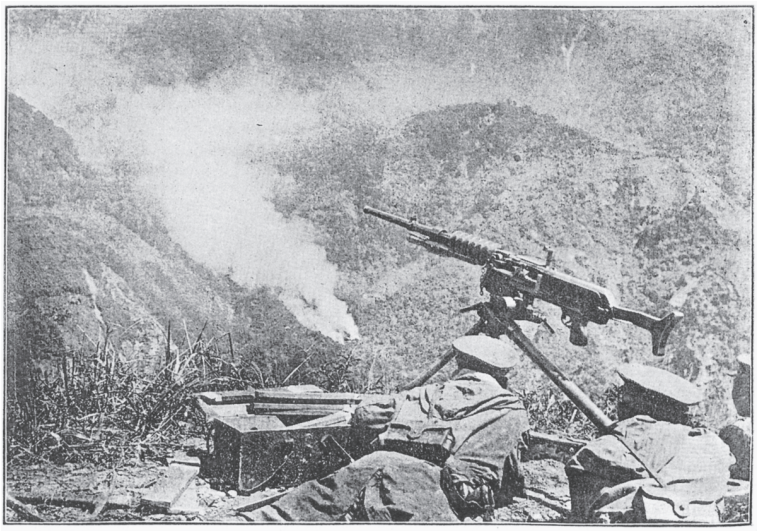


写真 10　「サカヘン」社水源地より同社蕃屋焼打の遠望 其二
『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』所収・東京都立図書館所蔵

写真 11　敵蕃固守せる蕃屋を占領し火を放って灰燼となす
『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』所収・東京都立図書館所蔵

写真 12　「サカヘン」社耕作地蹂躙の光景
『大正三年討蕃軍隊記念写真帖』所収・東京都立図書館所蔵

と耕地の破壊（耕作地蹂躙）を計画的に実施した。その結果、包囲されて食糧不足に陥り、村落と耕地を破壊された先住民は次々に降服した。守備隊は住民から銃器を押収し、銃器の代価として金品（現金のほか毛糸、塩、酒、米、ブリキ缶など）を給与し、「帰順旗」（耕地にこの旗を掲げて農作業すると日本側の攻撃を免れることができる）を与えた。討伐作戦は 6 月に始まり、8 月に終了した[18]。

むすびにかえて

本稿では、仙台に西南戦争後に設立され、日清戦争後に台湾に移住した遠藤写真館について考証を行い、遠藤写真館の家系と台湾移住の経緯について、従来の研究と違う意見を提示した。続いて、遠藤写真館が出版あるいは出版にかかわった台湾に関係する 4 冊の写真帖（1 冊は第 2 師団が参加した台湾植民地戦争への従軍写真帖、残り 3 冊は台北の遠藤寛哉写真館が撮影と発行にかかわった、第 5 代台湾総督佐久間左馬太陸軍大将時代―彼は長州出身の軍人であるものの、創設期の第 2 師団長として仙台に長期間滞在した、仙台と関わりの深い人物―の台湾の先住民に対する理蕃政策と討伐を記録した写真帖）について、掲載写真を目録化した上で（表 2 から表 5 まで）、その写真の内容と、どのような意図で写真帖が編集されたのかについて初歩的な検討を試みた。準備不足の論考で資料紹介に止まったので、別の機会に分析を深める必要があることを自覚している。

[1] 拙著『兵士と軍夫の日清戦争－戦場からの手紙をよむ－』（有志舎、2006 年）の 207 頁～209 頁「『戦勝国一大記念帖』と『征台軍凱旋紀念帖』」参照。
[2] 西村勇晴「宮城県最初の写真家・遠藤陸郎」（『いきいきライフみやぎ』1995 年 7 月号）および宮城県写真師会連合会編『宮城県写真 100 年史』（宮城県写真師会連合会、1988 年）参照。
[3] 星亮一『仙台戊辰戦史－北方政権を目ざした勇者たち－』（三修社、2008 年）。
[4] 前掲西村勇晴「宮城県最初の写真家・遠藤陸郎」参照。
[5] 従軍写真師遠藤誠編『征台軍凱旋紀念帖』（東京裳華房、1896 年 5 月）巻末の広告「遠藤写真館の名誉」を参照した。
[6] 時間の関係で調査できなかった宮内庁書陵部の写真・写真帖については、次の 2 点の論文を参照した。梶田明宏「書陵部所蔵明治大正期台湾関係写真帖について」（『書陵部紀要』第 62 号、2010 年 6 月）および白石烈「宮内省図書寮における明治・大正両時代御手許写真の整理（附目録）」（『書陵部紀要』第 69 号、2018 年 3 月）。白石論文の付属目録には次の 3 点の遠藤写真館関係資料が見える。①「磐梯山破裂実況写真集」（1888 年）、②「遼東之野戦闘之状況等ノ写真帖」（1895 年）、③「大正二年討蕃記念写真帖」（1913 年、コロタイプ印刷）。表 1 との関係では、①は表 1 の 1「磐梯山破裂写真説明略二十八葉一部」と、②は表 1 の 3『戦勝国一大記念帖』と、③は表 1 の 7 の『討蕃軍隊記念写真帖』と対応しているようである。ただし、②は印刷ではなく、焼き付けした写真を貼付した写真帳で、内容も『戦勝国一大記念帖』と若干の相違があるようなので、実際に確認してみる必要がある。
[7] 裳華房の歴史　https://www.shokabo.co.jp/history.html　参照。
[8] 第 2 師団司令部は仙台に置かれ、主力の歩兵部隊は歩兵第 3 旅団（旅団司令部仙台・旅団長山口素臣少将。歩兵第 4 連隊（仙台）と歩兵第 16 連隊（新発田）が所属）と歩兵第 4 旅団（旅団司令部青森・旅団長伏見宮貞愛親王。歩兵第 5 連隊（青森）と歩兵第 17 連隊（仙台）が所属）であった。
[9] 混成旅団とは、歩兵連隊 2 個からなる歩兵旅団に、砲兵、騎兵、工兵、輜重兵などの専門部隊を付属させたミニ師団である。
[10] 拙著『兵士と軍夫の日清戦争』（有志舎、2006 年）の第 7 章「台湾の戦争」参照。
[11] 近藤正己「台湾における植民地軍隊と植民地戦争」（坂本悠一編『地域のなかの軍隊 7－帝国支配の最前線・植民地』吉川弘文館、2015 年）の 41 頁および 57 頁を参照。近藤論文は植民地台湾の軍事組織を概観したもので、拙稿が問題にする理蕃政策と軍隊の関係についても簡明に説明しており、拙稿の台湾守備兵力に関する叙述は近藤論文に依拠している。
[12] 理蕃五ヵ年計画時の台湾の地方制度は、1909 年から 1920 年までは 12 庁体制であった。『増訂版台湾歴史地図』（国立台湾歴史博物館、2018 年）の「日治時期行政区画演変」（98 頁～100 頁）を参照。
[13] 前掲近藤正己「台湾における植民地軍隊と植民地戦争」の 58 頁～60 頁。五ヵ年計画理蕃事業に関する基本的な記録は、台湾総督府警務課編『理蕃誌稿第三編・上下巻』（1921 年）〔南方資料叢書 10-2 『理蕃誌稿』第 2 巻、青史社、1989 年として復刻されている〕。また山辺健太郎編『現代史資料 22 台湾 2』（みすず書房、1971 年）所収の「16 蕃地調査書」と「17 蕃人の動揺及討伐の概略」も参照。
[14] 菊池一隆「台湾北部における日本討伐隊とタイヤル族―対日抵抗と「帰順」―」（『人間文化:愛知学院大学人間文化研究所紀要』29、2014 年）を参照した。なお、本論文も収録された菊池『台湾北部タイヤル族から見た近現代史―日本植民地時代から国民党政権時代の「白色テロ」へ―』（集広社、2017 年）は、「山の人」の視点で見直した台湾近代史叙述の試みで教えられることが多かった。拙稿の叙述にはまだ十分生かせていないが、現在、再読を重ねて勉強中という状態である。台湾総督府は山岳地域の先住民を 7 族に分類していたが、現在の台湾行政院では 16 族に分ける。ちなみに、かつてのタイヤル族は、現在ではタイヤル族、タロコ族、セディック族に三分されている（前掲『増訂版台湾歴史地図』10 頁～11 頁）。
[15] 前掲『現代史資料 22 台湾 2』の 515 頁～523 頁参照。
[16] 長岡市出身の大橋佐平が起こした出版社の雄・博文館（1887 年 東京本郷で創業）の印刷部門として 1897 年に博文館印刷所が設立されるが、その博文館印刷所に勤務していた博文館理事大橋光吉が 1906 年に設立した平版印刷・美術印刷中心の印刷会社が精美堂である。1926 年、博文館印刷所と精美堂は合併して共同印刷株式会社を設立し、大橋光吉が社長に就任した。精美堂の高度な印刷技術については、浜田徳太郎編『大橋光吉翁伝』（共同印刷、1958 年）の 29 頁～36 頁「精美堂創業」を参照。
[17] ガオガン方面隘勇線前進については、前掲『現代史資料 22 台湾 2』の 516 頁～517 頁および前掲『理蕃誌稿』第 2 巻の 547 頁～675 頁を参照。
[18] 太魯閣（タロコ）蕃討伐については、前掲『現代史資料 22 台湾 2』の 521 頁～522 頁および前掲『理蕃誌稿』第 2 巻の 919 頁～1037 頁を参照。

表 2　『征台軍凱旋紀念帖』所載写真目録

写真番号		題辞・写真キャプション等	備考
	表紙	従軍写真師遠藤誠編　征台軍凱旋紀念帖　東京　裳華房発行	
	肖像写真 1	明治天皇／皇太子	
	肖像写真 2	故有栖川親王殿下／故北白川親王殿下	
	肖像写真 3	参謀総長小松宮殿下／参謀次長川上陸軍中将	
	肖像写真 4	台湾民政長官水野遵君／台湾総督樺山海軍大将	
	肖像写真 5	近衛師団長野津陸軍大将／近衛師団第一旅団長河村陸軍少将／近衛師団第二旅団長阪井陸軍少将	
	肖像写真 6	第二師団長乃木陸軍中将／第三旅団長山口陸軍少将／第四旅団長沖原陸軍少将／元第四旅団長陸軍少将貞愛親王殿下／元歩兵第四連隊長現台湾第一旅団長仲木陸軍少将	
	肖像写真 7	野戦砲兵第二連隊長西村大佐／第二憲兵隊長小笠原中佐／歩兵第十七連隊長滝本大佐／篠原監督部長／輜重兵第二大隊長新庄少佐／騎兵第二大隊長山岡中佐／工兵第二大隊長木村中佐	
	肖像写真 8	混成第七旅団長大久保陸軍少将／混成第七旅団歩兵第八連隊長前田大佐／混成第七旅団歩兵第九連隊長草場中佐／澎湖島攻撃の混成支隊長比志島大佐及各将校の一行	
	肖像写真 9	盛京省金州に於て近衛師団長及各将校台湾出発として紀念の真影	小川一真写真彫刻銅版及印刷
	肖像写真 10	元台湾総督劉永福肖像	
1	1～2	上段　比志島混成支隊澎湖島へ上陸の為め海戦の光景	
2		下段　澎湖島内に於ける日本軍死亡者千人塚	
3		下段　澎湖島内に於ける仏国将軍クールベーの墓	
4	3	台湾南進軍司令部陸海軍将校及相当官真影	版権所有（陸地測量部）
5	4～5	上段　台湾島基隆港に於る我軍夫宿営の光景	
6		下段　基隆港内歩兵第五連隊乗組の和泉丸碇泊の光景	
7	6	台湾島基隆港岸に於る我軍夫宿営の光景	
8		淡水河口に於ける敵の運送を目撃するの光景	
9	7	社寮島の兵営	
10		台北県庁の内部	
11		社寮島第一砲台三十三珊砲台	
12		台北城外の寺院石造の美術	
13		淡水河岸に於ける骨堂	
14	8	台湾島基隆へ上陸後陸行せし歩兵第五連隊補充隊の四中隊台北北門外に休憩の状況	版権所有（陸地測量部）
15	9	基隆に於ける歩兵第十七連隊守備本部の裏門	
16		基隆港砲台監視隊の光景	
17	10	台北西南門即ち重熙門の光景	
18		台北府龍山門に於ける歩兵第五連隊兵営宿舎	
19	11	混成第四旅団基隆港より出発水返脚に停車せし光景	明治廿八年七月撮影
20.21	12	台北府城内の光景　2 枚	
22		台北城宝成門の光景	
23		我軍艦烈風の際南進軍輸送船を護送して馬公湾に着する光景 2 枚	
24	13	台湾島台北淡水河畔居留地及鉄道橋一部の光景	版権所有（陸地測量部）
25	14	台北より新竹に至る鉄道線兼通行路の鉄橋	
26		淡水河口外国人の邸宅	
27		台北西南門一名小府門	
28		台北淡水河畔居留地一部の光景	
29		台北元脳務総局及び兵営今わ南進軍司令部	
30	15	台北居留地商館に於ける支那婦人の茶撰	
31		台北淡水河畔に於ける支那婦人洗濯の状況	
32		台北市街に於ける果物商店	

写真番号		題辞・写真キャプション等	備考
33		台北淡水河渡船場より輿にて支那人上陸の状況	
34		台北鉄道線兼通行路を支那人歩行する状況	
35	16	淡水河口滬尾市街一部の光景（其一）	
36		（其二）	
37		淡水河口滬尾河岸一部の光景	
38		淡水河口滬尾に於ける日本税関の光景	
39	17	台湾島台北市街一部の光景	明治廿八年九月廿二日撮影
40	18	台北艋舺市街内池畔に於る支那婦人の洗濯	
41		淡水河口滬尾に於る英国領事館の光景	
42		淡水河口滬尾市街一部の光景	
43		淡水河口滬尾砲台一部の光景	
44	19	台北西門街支那商店一部の光景	
45		台北西南門楼閣及市街一部の光景	
46		台北北門外大稲呈を横断する鉄道兼通行路の状況	
47		台湾総督府門旧台湾布政使衙門の状況	
48	20	台北北門の楼閣及同市街一部の光景	
49		台北西門外艋舺付近農家に於ける支那婦人の状況	
50		台北西門外艋舺市内に在る淡水寺本堂の光景	
51		台北北門外停車場近傍寺院の光景	
52	21	台北城内西門街通り石造門前に於て台湾人薪担荷の景	
53	22	台湾島新竹市外聖廟内兵站部に於て支那人人夫に諭示する所の状況	版権所有（陸地測量部）
54	23	台北総督府内に於て樺山総督及生蕃人の状況	
55		台北総督府内に於る生蕃人の風俗	
56	24	台湾島台北県庁に於ける祝捷会後の光景	
57	25	我軍枋寮に上陸するの光景	
58		枋寮に上陸したる歩兵第四連隊進軍するの図	
59	26～27	上段　混成第四旅団布袋子に於て戦闘の光景	明治廿八年十月十一日撮影
60		下段　社寮島砲台に於ける混成第四旅団歩兵弾薬第二縦列屯営の光景	明治廿八年十一月廿六日撮影
61	28	台北城内陸軍野戦病院	
62		布袋子へ上陸の陸戦隊を援護して済遠号より砲撃するの図	
63	29～30	上段　第二師団第三旅団第四連隊海軍の援護を受け東港河口を渡歩するの光景	明治廿八年十一月十一日撮影
64		下段　第二師団野戦砲隊曾文溪攻撃の光景	明治廿八年十月廿日撮影
65	31	塩水港に於て黒旗兵戦死の状況	
66		曾文荘戦後に於ける敵兵死体の状況	
67	32	澎湖島馬港湾に於て横浜丸乗込混成第四旅団長伏見宮殿下一行の光景	
68		基隆港社寮第二砲台三十三珊砲の光景	
69	33	台南城の遠景	
70		台南城内シヤボテンの繁殖	
71		台南城内竹林	
72		塩水港市街戦後の光景	
73		安平砲台より安平市街を望む	
74	34	安平港に於ける分捕の武器運送するの図	
75		安平港の砲台	
76	35	台北府停車場	
77		土人作業の図	
78		台北市街	
79		土人田植の図	
80		土人担荷の図	
81	36	台南府小北門の光景	
82		台南北門に於ける第三旅団の守備	
83	37	台南府に於て天長節をトし祝勝大会の光景	

写真番号		題辞・写真キャプション等	備考
84		台南府に於て天長節をトし祝勝大会の遠景	
85	38	台湾島新竹停車場汽車発車前の光景	版権所有（陸地測量部）
86	39	台湾総督以下諸将校等の真影	版権所有（陸地測量部）
87	40	故近衛師団長北白川宮殿下台南府に於ける御寝室の実況	明治廿八年十月撮影
88		征台軍名誉戦死者鳳山府に於て吊祭の光景	明治廿八年十二月撮影
89	41	近衛師団凱旋歓迎の光景　5 枚	
90	42	東京九段招魂社に於て征清忠死者招魂大祭の真影	
91	43～44	第二師団長乃木中将及各将校停車場前に於て歓迎の光景	明治廿九年四月廿二日撮影
92		第二師団凱旋仙台停車場前歓迎の光景	明治廿九年四月二十日撮影
	奥付	明治二十九年五月十一日印刷 明治二十九年五月十四日発行 編輯兼発行者　遠藤誠　宮城県仙台市立町通三番地 発行兼印刷者　芳野兵作　東京日本橋区本石町三丁目十三番地 発売所　裳華書房　東京日本橋区本石町三丁目十三番地 発売所　遠藤写真館　宮城県仙台市立町通三番地 印刷所　小川写真製版所支店　東京市京橋区日吉町十三番地	
	広告	遠藤写真館の名誉	

表 3　『蕃匪討伐記念帖』所載写真目録

写真番号		題辞・写真キャプション
	表紙	
	題辞	開発皇土　研海　　佐久間左馬太陸軍大将・台湾総督
		懲蕃余影　泉城　　小泉正保陸軍中将・元台湾第一守備隊司令官
		櫛風沐雨　野島少将　野島忠孝陸軍少将・台湾第一守備隊司令官
	序文	陸軍歩兵大佐　奥村信猛台湾歩兵第一連隊長
	肖像写真 1	台湾総督佐久間左馬太陸軍大将／野島陸軍少将／小泉陸軍中将／奥村陸軍歩兵大佐
	肖像写真 2	陸軍歩兵中尉藤波八五郎・戦死／陸軍歩兵中尉西村常輔・戦死／陸軍歩兵太尉川和田宗一・戦死／陸軍歩兵中尉野澤銈蔵・戦死／陸軍歩兵太尉松山寅雄・病死
	地図	
	宜蘭方面	
1	1	蘇澳港内ノ景（討伐隊上陸地）
2		円山ニ於ケル濁水渓本流釣橋
3	2	円山ニ於ケル台湾第一守備隊司令部及宜蘭前進隊本部ノ全景
4		円山ニ於ケル侍従武官長中村中将ノ一行（侍従武官長中村覚中将、小泉台湾第一守備隊司令官、河合大佐、小松前進隊長）
5	3	円山付近ニ於ケル濁水渓ノ奔流
6		円山患者療養所
7		濁水渓「バヌン」倉庫ノ全景
8		「バヌン」倉庫内部ノ景
9	4	「パコン」台守備隊露営地
10		「パコン」付近ニ於ケル「ボンボン」山ニ至ル新設路
11	5	旗山ニ於ケル台湾歩兵第一連隊本部ノ幕露地全景
12		旗山ニ於ケル歩兵第一連隊長奥村大佐以下本部員
13	6	旗山南麓ノ鉄条網
14		旗山守備隊背面防禦線ノ監視兵
15		旗山ニ於ケル歩兵第一連隊本部通信所
16		旗山倉庫ノ全景
17	7	旗山ニ於ケル遺骨安置所内部ノ景（大箱ノ内ニ更ニ小箱アリ）
18		「ボンボン」山陣地巡視中ノ奥村大佐ノ一行漆崎山檜坂ニ休憩（此地ハ海抜六千尺ニシテ歩兵一分隊ノ守備員アリ）
19	8	漆崎山檜隧道（敵蕃此ノ樹根ノ隧道ヲ扼シ頑強ノ抵抗ヲナセリ左側ノ小屋ハ警察隊ノ築ケル掩堡ナリ）
20		漆崎山古戦場
21		「ボンボン」山ニ於ケル敵蕃掩堡ノ一種
22		「ボンボン」山頂ニ於ケル砲兵陣地（蕃社砲撃中）
23	9	漆崎山我軍陣ノ掩堡（樹木ノ横ヘルハ占領後我守備隊ノ堡塁胸墻ニシテ空瓶ノ吊シアルハ敵ノ接近ヲ予察センガ為ナリ）
24		漆崎山ニ於ケル川和田大尉戦死ノ地（標木ノ位置ハ同太尉壮烈ナル最後ノ所ナリ）
25	10	漆崎山ニ於ケル漆崎中隊奮戦ノ地
26		「バコン」三叉点ヨリ旗山(A)・漆崎山(B)及「ボンボン」山(C)ヲ望ム（天幕ノ位置ハ旗山）
27	11	旗山ヨリ「バコン」三叉点(A)及「バヌン」濁水渓ヲ望ム
28		「ボンボン」山頂ヨリ第一(A)第二(B)第三(C)第四(D)高地ヲ望ム（幕営ハ大久保隊本部）
29	12	「ボンボン」溪小林合流点輸送中継所ノ全景
30		「ボンボン」溪輸送中継所倉庫員
31		「ボンボン」山第一高地我急造廠舎
32		「ボンボン」山第一高地砲兵陣地（カラホ社ノ射撃）
33	13	「ボンボン」山第一高地ヨリ「ボンボン」山頂ヲ望ム（山頂ノ天幕ハ砲兵隊山腹ノ廠舎ハ久保大隊本部）
34		「ボンボン」山頂ノ軍路（其一）
35		「ボンボン」山頂ノ軍路（其二）
36	14～15	上段 「ボンボン」山頂ヨリ「シナレク」山(A)「クル」山(B)並遙ニ烏嘴山(C)及李頭山(D)ヲ望ム（斜面樹木ナキ部ハ蕃人ノ耕作地及付近ノ草原ナリ）
37		下段 「ボンボン」山付近ノ交通路（土嚢及石塊ヲ積ミタルハ敵ノ狙撃ヲ防ガンガ為ナリ）
38		下段 「ボンボン」山付近物資輸送ノ景
39	15	「パラ」山ヨリ「シナレク」山ヲ望ム（A ハ有名ナル鞍部 B ノ下方ハ田丸合流点）

写真番号		題辞・写真キャプション
40		「パラ」山ニ於ケル山砲兵陣地(「シナレク」山頂ノ敵蕃ニ対シ射撃中)
41	16	「パラ」山ニ於ケル山砲兵隊炊事場ノ光景
42		「シナレク」渓竹内合流点炊事場
43		「シナレク」田丸合流点ニ於ケル警察別働隊長中間警部ノ操縦スル帰順屈尺蕃人
44	17	田丸合流点ニ於ケル台湾歩兵第一連隊本部ノ全景
45		田丸合流点連隊本部前ニ於ケル歩兵第一第二両連隊長英国代理領事並曹洞宗布教使其他
46	18	田丸合流点倉庫ニ於ケル人夫食事ノ光景
47		田丸合流点倉庫員並軍需品輸送人夫
48	19	「シナレク」山腹山井中隊陣地ノ一部
49		「シナレク」山鞍部ニ至ル軍路
50		竹内合流点ヨリ「シナレク」山中腹山井中隊ノ陣地ニ至ル桟道
51		佐澤大隊「シナレク」山第一突稜占領ノ為旗山出発ノ光景
52	20	「シナレク」山攻撃ノ際宮崎山砲連隊陣地侵入ノ光景(大森林ヲ以テ蔽ハレタル峻山ニシテ昼尚暗シ)
53		「シナレク」山腹ノ陣地ニ飲料水運搬ノ景況(急峻ノ地ナル故担樋ヲ使用スルヲ不得竹筒ヲ応用セリ)
54	21	「シナレク」山腹ニ於ケル松澤中隊ノ陣地ヨリ敵蕃射撃ノ光景
55		「シナレク」山腹敵蕃ノ旧掩堡(竹内大隊苦戦ノ地)
56		「シナレク」山腹山井中隊陣地ノ一部
57		「シナレク」山腹ニ於ケル山井中隊主力ノ掩壕
58	22	「シナレク」竹内合流点ヨリ第一線部隊へ糧食輸送
59		「シナレク」山腹杉澤中隊ノ一部(戦闘線)
60		「シナレク」山腹杉澤中隊散兵線ノ一部
61	23	「シナレク」山腹砲兵陣地ヨリ「シナレク」山頂ニ対シ射撃ノ景
62		「シナレク」山腹ヨリ同山鞍部へ向ケ山砲兵陣地変更
63		「シナレク」山腹我砲兵陣地ヨリ射撃ノ光景(シナレク(A)山頂ニ命中破裂シ爆煙ヲ揚グ)
64	24	「シナレク」山ニ於ケル敵蕃ノ旧掩堡ヲ利用セル我散兵(軍路上ニ踞セルハ警察隊員ナリ)
65		「シナレク」山ニ於ケル敵蕃ノ旧掩堡ヲ利用セル我歩哨
66		「シナレク」山腹樹根ヲ掘開セル敵蕃掩堡ノ一部
67		「シナレク」山鞍部ニ於ケル竹内大隊長以下幹部
68	25	「ボンボン」渓ノ清韻
69		「シナレク」渓竹内合流点ノ幽邃
70		「シナレク」山鞍部我砲兵陣地
71	26	「シナレク」山鞍部松澤中隊ノ陣地(斜面急ニシテ通路ニ梯子ヲ用フ)
72		「シナレク」山鞍部ヨリ旧砲兵陣地タリシ「ラパ」
73		「シナレク」山第一突稜ニ於ケル佐沢大隊長以下幹部
74	27	「シナレク」山第一突稜佐沢大隊露営地
75		「シナレク」山第三突稜我砲兵陣地
76	28～31	上段 「シナレク」山頂ヨリ A「ババポークル」山、B「ミヨート」山、C 角板山方角、D「バロン」山、E 李頭山及烏嘴山大鞍部方角、F「クル」山、G「コルン」山、H 大覇尖山方角、I 西村合流点(深谷内)並ニ「ガオガン」蕃社地一帯ノ谷地ヲ望ム
77		下段 「シナレク」第三突稜ヨリ A「クル」社草原ヲ隔テ B「カラホ」社(白部ハ畑地)ヲ望ム
78	32	「クル」社吉村台ニ於ケル久保大隊ノ一部防禦工事
79		「クル」社草原ニ於ケル久保大隊一部築営作業
80		「シナレク」第三突稜ニ於ケル佐澤大隊本部ノ全景
81		第三突稜守備松山中隊並同稜支庫ノ幹部
82	33～34	上段 「シナレク」山第一突稜(佐澤大隊占領)ヨリ第三突稜(A)ヲ隔テ遠ク「カラホ」社(B)ヲ望ム(禿タル部分ハ「カラホ」社耕作地ナリ)
83		下段 吉村台ヨリ「クル」社(A)及「ハカワン」社(B)ノ遠望
84		下段 吉村台ニ於ケル久保大隊本部築営作業
85	35	「クル」社佐澤台ニ於ケル独立重砲兵小隊ノ陣地
86		「クル」社ヨリ見タル「ハカワン」社(A)
87	36	佐澤台ヨリ「バロン」山(A)角嘴山(B)及李頭山(C)ヲ望ム(D ハ「バロン」社)
88		佐澤台ヨリ「ハカワン」社(A)ヲ望ム
89	37	佐澤台付近「クル」社蕃人耕作地(芋畑)
90		「ルク」社佐澤台倉庫建築中ノ景
91		佐澤台山砲兵陣地

写真番号		題辞・写真キャプション
92	38	佐澤台佐澤大隊本部ニ於ケル「ピヤサン」社蕃丁及蕃童
93		「クル」社佐澤台ニ於ケル機関銃陣地
94		在佐澤台警察別働隊長中間警部ノ許ニ会見ニ来リタル「テエリツク」社及「ブトノカン」社両土目竝蕃丁ノ一行
95	39	佐澤台ニ於ケル大内砲兵隊将校以下
96		竹内台守備部隊ノ急造廠舎
97		竹内台防禦陣地ノ一部
98	40	「クル」社佐澤台ニ於ケル小泉中将飯田少将竹下大佐竝同台及其付近守備部隊将校
99		竹内台ヨリ「バロン」社ヲ望ム（A ハ「バロン」社ナリ）
100	41	竹内台ニ於ケル竹内大隊ノ露営地（作業中）及「ピヤサン」社(A)遠望
101		竹内台ヨリ「ハカワン」社(A)ヲ望ム
102	42	「タマン」溪ニ於ケル台湾第一守備隊司令部ノ廠営
130		「バロン」山ヨリ「タマン」溪守備部隊廠営地(A)「クル」山竹内台(B)及佐澤台(C)ヲ望ム
104	43	「バロン」山ニ於ケル歩兵第一連隊本部及前進隊総本部ノ幕営
105		（コピーが切れて不明）
106		「バロン」山倉庫全景
107	44	「バロン」山ヨリ「ブシヤ」社及遠ク「マリコハン」溪谷ヲ望ム（A ハ「エヘン」社）
108		「バロン」山頂ヨリ「ソロ」社及「カオリヤン」社ヲ望ム
109	45	「バロン」山頂ヨリ「ブシヤ」社及「ガオガン」合流点ヲ望ム（A ハ「エヘン」社）
110		「バロン」山頂ニ於ケル我砲兵陣地
111		「バロン」社蕃人ノ一家族竝ニ家道具一式
112	46	「タカサン」社蕃屋
113		「タカサン」社蕃婦織糸作業
114		天長節「バロン」山守備隊ニ来遊ノ「バロン」社帰順蕃人ノ凱旋踊
115		天長節「バロン」山宿営地ニ於ケル兵士角力娯楽
116	47	「タカサン」社付近ヨリ「バロン」山ヲ望ム（A ハラ溪合流点）
117		「タカサン」社付近ヨリ新竹桃園連絡点付近ヲ望ム（A ハ桃園道 B ハ新竹道）
118	48	新竹桃園連絡点ニ於ケル釣橋
119		「カオリヤン」社付近ニ於ケル患者休憩所
120		「カオリヤン」社付近竹内第三大隊本部将校以下
121	49	宜蘭分院内ノ将校病室
122		宜蘭分院内ノ下士兵卒病室
123		「タカサン」社陸軍倉庫中継所
124		台北衛戍病院宜蘭分院
	桃園方面	
1	1	桃園庁角板山派遣出口中隊ノ廠舎竝枕頭山砲台ノ遠望
2		角板山倉庫
3	2	角板山倉庫ヨリ新竹及「バロン」山方面ニ軍隊物資輸送出発ノ景
4		大嵙崁、角板山間ノ軽便鉄道物資輸送ノ景
5		角板山蕃人稲穂摘ノ景
6		合脂坪ヨリ旧隘勇線竝合脂頭監督所ヲ望ム
7	3	帰順セル「ガオガン」蕃台北観光帰途角板山ニ於テタ食ノ景
8		「ラハオ」原野ヨリ旧隘勇線断崖ヲ望ム
9	4	大嵙崁溪「ラハオ」渡船場
10		旧隘勇線断崖ノ隘寮
11		大嵙崁「ギヘン」釣橋付近ニ於ケル角板山派遣隊露営地
12	5	大嵙崁「キヨパイ」ノ綱渡（籠ニ人又ハ荷物ヲ容レ滑車ノ作用ニテ両岸ヨリ引ク）
13		「ギヘン」釣橋（長八十間）ノ遠景
14	6	南九母社出口ノ滝
15		大嵙崁溪ノ支流「ウライ」溪桂滝ノ全景
16	7	北九母社ノ景
17		「オライ」溪ニ於ケル架橋作業中本流ニ陥リ死セル故高橋軍曹及橋爪一等卒ノ葬儀
18		「キヨパイ」社南方馬背越（角板山ヨリ新竹線ニ至ル道路中最モ嶮難ノ所ナリ）
19	8	「ギヘン」釣橋ノ近景
20		南九母ニ於ケル軍需品中継所ノ全景

写真番号		題辞・写真キャプション
	新竹方面	
1	1	新竹庁樹杞林倉庫員
2		内湾全景（蕃地ニ入ル最終ノ部落）
3		尖石及北角砲台ノ景
4		「ブロアン」軍需品中継所ノ全景
5	2	帰順セル「ラハオ」蕃人ノ一部
6		「ラハオ」社蕃婦機織
7		「ラハオ」社蕃婦粟搗ノ景
8		「ラハオ」社首棚
9	3	合流山ニ於ケル第三大隊本部員
10		合流山陸軍患者療養所
11		六畜山及帽盒山ノ全景
12		「ラハオ」社付近守備小川堡塁
13	4	中ノ島古戦場
14		烏嘴山南麓茅原（太田中隊戦闘ノ地ニシテ戦死者一負傷者二ヲ出セシ所）
15		山砲隊野外修理ノ景
16		大鞍部付近ニ於ケル岡田中隊幹部
17	5	大鞍部ニ於ケル宜蘭方面ニ対スル展望所
18		陣中ノ娯楽
19		大鞍部ニ於ケル倉庫ノ一部
20		角嘴山及李頭山大鞍部ノ全景
21	6	大田中隊道路構築ノ景
22		大鞍部付近ニ於ケル通信班作業ノ景
23		「カオイラン」社付近露営地ノ一部
24	7	蕃匪討伐隊台北駅凱旋ノ景（十一月十四日）
25		凱旋部隊台北駅ヲ出テ屯営ニ向フ
26	8	台湾歩兵第一連隊凱旋当日軍旗奉送式ノ景
27		宜蘭方面ニ於ケル傷病者台北到着ノ光景
28	9	台北栄座ニ於ケル台北官民ノ凱旋軍隊歓迎祝賀会式場
29		同上余興
30		台北屯営ニ於ケル蕃匪討伐中戦死者霊祭式
31		台北本願寺ニ於ケル蕃匪討伐中戦病死者追悼会
32	10	生蕃人使用武器（台北博物館蔵品）向テ右端釣木ハ「シナレク」山密林内ノ戦闘ニ於テ敵蕃我戦死者ヲ樹叢中ヨリ奪取スル為ニ特ニ製造シタルモノナリ
33		生蕃人使用武器（台北博物館蔵品）蕃人ノ使用銃器ハ概シテ此ノ五種ニシテ吊シアルハ蕃刀竝弾薬挟ナリ
	奥付	明治四十四年五月廿五日印刷 明治四十四年五月三十日発行 著作者兼発行者 台北城内府前街三丁目十五番戸　遠藤寛哉 印刷者　台北城内府前街三丁目十五番戸　遠藤寛哉 印刷所　台北城内府前街三丁目十五番戸　遠藤写真館

表 4　『台湾蕃地写真帖』所載写真目録

写真番号		題辞・写真キャプション
	表紙	台湾蕃地写真帖 Views of Campaign against The Aborigines in Formosa
	題辞	開発皇土　研海　　陸軍大将佐久間左馬太台湾総督
		協和万邦　壬子冬日題　簫山　　樺山資紀初代台湾総督
		観風　獲堂題
	肖像写真 1	内田民政長官閣下／佐久間台湾総督閣下／大津蕃務総長閣下
	肖像写真 2	高塚警視／山本警視／後藤警視／賀来警視／相川警視／松山警視
	肖像写真 3	井村台北庁長／小松宜蘭庁長／西桃園庁長／家永新竹庁長／金子警部／山内警部／宇野警視
	肖像写真 4	枝台中庁長／石橋南投庁長／中田花蓮港庁長／市来警視／淵辺警視／雨田警部／永田警視
	序	台湾日日新聞　下平卓爾　　大正元年十月(1912 年)
	序	編者識　　遠藤寛哉ヵ
	地図	台湾蕃地地図
	地図	台湾蕃族分布図
	解説	理蕃概要　　岡野才太郎
1	1	台北庁挿天山方面の前進隊員
2		前大島警視総長臺北庁獅仔頭山前進線の巡視
3		台北庁シラツク方面前進隊員
4	2	台北庁(ラハウ)の大樟樹と侍従武官一行、向て右大島警視総長中央は侍従武官
5		台北庁(ウライ)社附近ノ鉄線橋
6		台北庁(ウライ)社附近温泉場
7	3	明治四十三年二月佐久間総督蕃地巡視ノ際台北庁(リモガン)ニ於テ総督ノ訓示
8		台北庁(ウライ)社帰順蕃人(タイヤル族)
9	4	明治四十一年五月宜蘭庁大南澳方面前進隊長中田庁長激浪中乗船
10		同五月大南澳方面地に於け隊長中田庁長及副長江口警部其他
11	5	明治四十一年五月宜蘭庁大南澳前進隊第三部隊の目的地占領
12		前記大南澳前進の際同所に於て鉄條網を架設し是れに電流を通じ以て蕃人の浸入を防ぎたり、其際使用せし発電器
13		第三部隊の占領せる蕃橋
14		同年五月の前進に於て蕃人遂に我隊に降る茲に於て同蕃(大南澳蕃)の帰順式を行ふ
15	6	明治四十三年六月宜蘭庁下(ガオガン)蕃討伐の際円山に於ける前進隊本部の全景
16		円山に於ける前進隊員と帰順せる南澳蕃人
17		円山に於ける前進隊本部前面濁水の架橋並鉄線橋
18	7	(ガオガン)蕃討伐の際圓山に於ける前進隊本部救護班
19		討伐当時発見せる(ボンボン)溪川岸の温泉並に(ボンボン)山に至る輸送路
20		(ボンボン)溪に築造せる前進隊の掩堡
21	8	旗山に於ける連隊本部、明治四拾三年六月（ガオガン）蕃討伐の際台湾守備歩兵第一連隊の根拠地にして同所に軍旗を安置せしを以て旗山と称す
22		(ボンボン)山中の檜墜道と隘勇線
23		漆崎山に於ける苦戦地、（ガオガン）蕃討伐の際此地に於て漆崎大尉神保中尉共に負傷セリ
24	9	(ガオガン)蕃討伐の際(ボンボン)山最高地より前進隊員迫撃砲を以て敵蕃を砲撃す
25		田丸合流地に於ける前進隊本部全景
26		(ボンボン)山頂より遠く(パーパツク)を望む
27	10	(ガオガン)蕃討伐の際軍警両隊の苦戦地にして（シナレグ）山鞍部の三五山なり、前面の天幕は前進隊員の廠舎なり
28		(ガオガン)蕃討伐の際警察砲隊(シナレグ)山急坂を三吋野砲運搬の実況
29	11	(ガオガン)蕃討伐の際茅原竹内台より(バロン)山を望む
30		佐澤台に於ける中間警部と会見に来りたる(ガオガン)蕃、（テエリツク）社及（ブトノカン）社両土目並蕃丁
31	12	(バロン)山頂より遠く(マリコワン)蕃を望む
32		(バロン)山頂より遠く(マリコワン)蕃社砲撃準備
33	13	(ガオガン)蕃討伐の際敵蕃遂に帰順を申出たるを以て(バロン)山前進部本部に於て大津蕃務総長銃器提出示連式を行ふ
34		(ガオガン)左岸帰順の結果銃器提出の狀況

写真番号		題辞・写真キャプション
35		(ガオガン)蕃討伐の際戦死及病死せる前進隊員の招魂祭
36		宜蘭庁下蕃人の帰順後提供せし首級(髑髏) 全部を合祀せる首塚
37	14	明治四十五年春佐久間総督閣下蕃界巡視の際宜蘭庁ボンダ山最高地に於て撮影、右より三小松庁長佐久間総督大津蕃務総長隠明寺副官高屋属
38		南澳蕃第一の美人
39		進化せる蕃人青山勇氏同やぶん
40		明治四十三年十月宜蘭庁ガオガン蕃討伐中巡視の内田民政長官、右より前列奥村連隊長、内田民政長官、小松宜蘭庁長、後列右亀岡連隊副官、斎藤秘書官、野呂技師
41	15	明治四十一年五月桃園庁枕頭山中央高地と北角にして即ち右方高地に於て五月十二日早川前進隊長戦死せリ
42		明治四十一年五月桃園庁枕頭山占領目的を以て行動を開始するや、蕃人反抗最も猛烈にして我隊損害多大なリ、故に枢要地点に坑道を構築し之より物質運搬を為せリ 其の一
43		其の二
44	16	明治四十二年八月桃園庁六音山最高地及第二高地鞍部にして左右両翼隊の連絡地点とす、左方森林中に蕃人潜伏反抗盛にして拾数日退却せず熾に応戦せし所とす
45		六音山中腹第二部隊占領地及附近急造鉄條網
46		枕頭山北角苦戦地
47	17	六音山右翼第四部隊の苦戦後占領せる地点
48		六音山最高地占領の目的を以て築造せる新砲台にして同地点に向へ盛なる砲撃を加へたリ
49		明治四十二年八月桃園庁六音山最高地突角に於て敵蕃頑固に拠守せる森林中の岩窟にして激戦拾数日に至るも敵蕃容易に退却せず、銃砲弾丸彼の頭上を掠めて樹木を飛ばし殆ど樹枝を存する者なく、木片は弾痕によりササラの如し、以て激戦の状察すべし
50	18	桃園庁挿天山方面前進の際敵弾の為負傷せる患者を阿姆枰救護所に収容の実況
51		桃園庁旧(バプン)の鉄線橋
52		(ガオガン)蕃討伐の際苦戦したる桃園庁(タカサン)社物貨輸送中続所
53	19	明治四十三年二月桃園庁見返坂隘勇線に於ける佐久間総督一行
54		桃園庁角投山物品交換所に於ける侍従武官一行、蕃人中央向て左より六大津蕃務総長七侍従武官八西桃園庁長
55	20	桃園庁(ウライ)社の桂滝明治 43 年 10 月上流に於て架橋中軍曹高橋氏橋爪一等卒あやまつて陥リ遂に同滝に流落して死せリ軍曹桂氏の発見に係る
56		桃園庁(ハブンピン)の鉄線橋長さ百間
57		桃園庁蕃地石門
58	21	桃園庁角投山(角板山ヵ)蕃産物交換所、蕃産物中央円形は投草左端は獣皮及麻其他は果実織物、同庁角投山に於て帰順せる蕃童を集め学業を授け以て彼等の知育を発達せしめんとす
59		蕃童教育所に於ける唱歌教授
60		数学及国語
61		僧侶の修身講話
62	22	写真は蕃童中の秀才にして桃園小学校に在る宇都木一郎なり、西桃園庁の命名に係る紙面は今夏帰社中庁長に宛送りし礼状なリ
63		蕃童を収容せる寄宿舎及蕃童
64		蕃婦少女に織業を授く
65	23	桃園庁角投山(ママ)に於て帰順蕃人に農事を教授す開墾作業
66		水牛を用ひて耕作す
67		播種
68	24	桃園庁角投山(ママ)に於て蕃人穂陸稲摘陸稲(蕃名コーレー)
69		南京豆耕作
70		柑橘園の除草
71	25	角投山(ママ)授産場に於ける蕃童の轆轤作業
72		轆轤工場に於ける材料
73		轆轤工場に於て内地人職工蕃童に下駄製作を教ふ
74	26	新竹庁内湾溪尖石
75		尖石方面より蕃社砲撃の光景
76		鹿場隘勇監督所に於ける前進隊本部
77	27	明治四十四年新竹庁李崠山方面前進に於ける苦戦地李崠台全景
78		明治四十四年新竹庁李崠山頂に於ける英国武官ヲリバー中尉及宇野警視江口警部一行

写真番号		題辞・写真キャプション
79		李崕台より李崕山頂を砲撃す
80		新竹庁大日山砲台
81	28	明治四十四年新竹庁李崕山方面前進隊ナロ社の一部及占領當時氏原分遣隊の遠望
82		新竹庁鬼殺分遣所
83		李崕山方面前進の際敵弾の為め負傷せる患者後送の実況
84	29	明治四十五年春、新竹庁北勢蕃討伐の際同庁大克山に於ける佐久間総督にして三月廿七日朝総司令部前に於て撮影、中央は佐久間総督閣下、中列右より(一)江口副長、(二)家永新竹前進隊長、(三)加福警視、(四)隠明寺副官、(五)宮永参謀長、(六)高塚総指揮官代理、
85		明治四十五年三月二十七日佐久間総督閣下濱野山巡視の途中にして小円山に登らんとす
86		濱野山にして討伐の際濱野分隊長宇野警視共に此地附近に於て負傷せリ
87	30	新竹庁濱野山の難路、左方は峻厳壁立し到底路を開くに由なし、乃ち梯子を架して昇降し濱野分遣隊長負傷の地なり
88		連絡分遣所前鉄線橋、四十五年春北勢蕃討伐の際新竹台中両庁より行動を開始し、苦戦数十日遂に両前進隊此地に於て連絡す
89	31	新竹庁北勢蕃討伐隊大克山山砲隊にして明治三十七八年戦役の當時に於ける鹵獲品にして五拾口径露式海軍三吋速射砲なり、其最長射撃距離九千米突にして鈴木警部砲隊長なり
90		北勢蕃人久保山の兩側に頑強拠守せるを以て用心山より砲撃の実況
91		新竹庁北勢蕃討伐隊大克山井上砲隊にして野砲二門山砲四門を有す
92	32	新竹廳犬啼坂より用心山砲臺を望む右方前面に峙てるは久保山
93		新竹庁北勢蕃討伐隊濃霧中に於て敵蕃を砲撃す、敵蕃は久保山の両側に出没抵抗を継続するを以て久保山の砲台は予め方位射撃を照準に置き雨天又は濃霧の際と雖も敵蕃を砲撃す
94	33	新竹庁マリコワン蕃頭目(タイヤル族)、左ウラオ社土目(タウスノーミン)、右ウライ社土目(ユーミンワタン)
95		新竹庁犬啼坂の坂路、此の坂路は新竹線中に於ける最も嶮難の一にして削立せる峻厳各所に梯子を架し之に欄を設け伝へ以て昇降す、従う所の犬茲に至れば昇降すること能はず必ず啼く依て此の名来る、海抜実に四千九十二尺
96	34	明治四十五年春台中庁北勢蕃討伐の際埋伏坪仮橋に於て輸送部所属人夫巡査隘勇に護送せられ橋上を通過す
97		同大安溪右岸台中隊警察救護班
98		台中庁北勢蕃討伐の際南方眼鏡形高地永井部隊の塹壕なり長訳六十間深三尺乃至四尺
99		同台中隊萱原砲陣地、砲隊長は山県警部なり
100	35	明治四十五年二月台中庁北勢蕃討伐の際北方眼鏡形高地より蕃社を砲撃す、二月廿八日朝(ローブゴーウ)社を衝て之を焼失せんとす、先づ砲撃して総督閣下の観覧に供す、曳火弾蕃屋上に破裂す
101		砲撃終るや突撃隊は各人石油を盛りたる 四合瓶を携帯喊声を揚げて蕃社に驀進し火を風上に放ち四千(四十ヵ)有餘の蕃屋を灰燼に帰せしむ
102		南北眼鏡形高地の中間に於て前進隊員伐採作業
103	36	明治四十五年二月北勢蕃討伐の際南方眼鏡形高地より久保山を望む後方畳山は蘇魯司馬限にして其の下方大安溪なり
104		台中庁大甲溪稍来隘勇線を望む
105		台中庁白毛花帰順蕃人の收容
106	37	台中庁大甲溪に於ける巡視中の内田民政長官一行
107		台中庁白毛社方面前進当時の白毛橋
108		台中庁前進隊に於て用ひつゝある索探犬
109	38	台中庁東勢角の蕃童教育所
110		台中庁東勢角蕃少女織業教育所
111		台中庁東勢角蕃丁農事伝習の実況
112	39	明治 45 年 4 月南投庁白狗方面討伐の際前進隊本部及白狗社全景
113		長倉前進隊副長肖像
114		白狗方面討伐の際物資輸送に使用せし霧社蕃人物資輸送の状況
115		明治四十五年四月南投庁白狗方面討伐の際長倉副長一行の敵蕃と衝突の場所、激戦の後、長倉副長及仲本警部は抜刀奮戦中敵弾に中りて戦死す
116		仲本警部肖像
117	40	(サラマ)大鞍部中腹より合流点則ち北港溪を望む (一)輸送隊衝突場(四十五年四月廿八日) (二)五月三日長倉副長敵蕃と衝突の場所

写真番号		題辞・写真キャプション
118		白狗方面討伐の際依田部隊の苦戦地、敵蕃は一帯に掩堡を設け我が隊を扼止したる為我隊は敵の瞰射を受け蔵原警部は戦死す
119		南投庁(サラマ)鞍部の(コルク)樹林同所は海拔七千尺
120	41	髑髏四〇二級埋葬の墓、四十四年二月廿三日霧社蕃の内(ホウゴウ。コードウ。カツツク。タロワン。ケヘボ。スウクー。)六社蕃人の祖先以来出草馘首して秘蔵したるを提供せしめ(ホウゴウ)社蕃務官吏駐在所の側に埋葬したる者なり、明治四十五年七月一日佐久間総督巡視の際撮影
121		南投庁日月潭湖上には常に竹筏上に生活を営む者あり、面して同筏上に一家族は勿論鶏豚野菜に至る迄養作し大なる四手網を以て湖中の魚類を捕獲し以て生活の費を得殆ど終世を送るなり
122		南投庁補里社日月潭蕃社人の独木舟と浮島は一種の樹根雑草を以て構成したるものにして大風の為時々其位置を変更するなり
123		白狗社討伐の際石橋前進隊長の(ムカタータ。ムタブーブル。マカジーヘン)三社蕃人に對し訓示、向て左翼一番目に石橋隊長
124	42	花蓮港庁吉野村内地人移民部落圖は移民に依リ開拓しつゝあるも領台当時は蕃地なリ
125		明治四十四年六月内田民政長官花蓮港巡視中、同庁加礼宛農場に於ける一行
126		花蓮港庁七脚川社蕃人明治四十一年我前進隊に反抗せしを以て遂に同社蕃屋を焼払ヘリ
127		同七脚川社討伐の際前進隊員蕃人と戦闘の実況
128	43	嘉義庁新高山
129		嘉義庁阿里山神木(檜)神木目通周囲六十五尺、直径十二尺七寸、枝下四十五尺、総丈百三十五尺樹齢未詳
130	44	佐久間総督嘉義庁阿里山巡視中楠仔脚百社公館に於て総督同社蕃人を引見せらる
131		明治四十三年十月内田民政長官阿里山巡視
132	45	タイヤル族蕃婦の入黥
133		タイヤル族男子の弓術蕃人は矢を弓の內側に番ふ
134		タイヤル族蕃人夫婦
135	46	タイヤル族蕃人の陸稲の仕上
136		タイヤル族蕃人の耕作
137		タイヤル族蕃人の收穫祝
138		タイヤル族蕃人の粟搗
139	47	タイヤル族蕃婦の製糸
140		タイヤル族蕃婦の紬糸
141		タイヤル族蕃婦布織
142	48	タイヤル族蕃人の架せる藤の釣橋
143		タイヤル族蕃人の架せる木橋(宜蘭庁濁水溪)
144		タイヤル族蕃人の住家及米倉
145	49	アミ族蕃人の架せる竹橋
146		アミ族蕃人夫婦
147		アミ族蕃婦物資運搬
148	50	アミ族住家
149		アミ族娘の舞踏
150		アミ族蕃人の粟搗
151		アミ族男子
152	51	ブヌン族蕃人堅木を摩擦して火を生ぜしむ
153		ブヌン族男子
154		ブヌン族蕃娘の舞踏
155		ブヌン族蕃人の架せる竹橋
156	52	ツツオ族蕃人の合奏
157		ツツオ族蕃婦の水扱
158	53	パイワン族蕃人の一家族
159		首棚
160		パイワン族蕃人の彫刻
161	54	パイワン族青年合宿所
162		パイワン族蕃人の盛装明治四十二年日英博覧会の為め渡英蕃人の一部
163		パイワン族蕃人の住家
164		パイワン族蕃人水扱
165	55	ツアリセン族男子及婦人

写真番号		題辞・写真キャプション
166	56	ピユマ族男子
167		同族男子
168		同族女子
169		ピユマ族住家及家族
170	57	ヤミ族紅頭嶼蕃人の住家
171		ヤミ族蕃人男子
172		ヤミ族蕃人婦人
173		ヤミ族紅頭嶼イモロドナモン海岸及蕃人の住家
	奥付	大正元年拾壱月廿五日印刷大正元年拾壱月三十日発行著作者兼発行者　台北城内府前街三丁目十五番地　遠藤寛哉印刷者　東京市神田区鍛冶町廿六番地　森垣栄印刷所　東京市神田区鍛冶町廿六番地　精美堂発行所　台北城内府前街三丁目十五番地　遠藤写真館発売所　台北城内府前街三丁目十五番地　遠藤写真館　台北新起街一丁目四番戸　杉浦和作

表 5　『討蕃軍隊記念写真帖』所載写真目録

写真番号		題辞・写真キャプション等
	表紙	大正三年討蕃軍隊記念写真帖
	題辞	謁命納志　研海題　佐久間左馬太陸軍大将・台湾総督
		承宣帰生　松嶺題　平岡茂陸軍少将・台湾第一守備隊司令官
	序	大正 3 年 10 月 23 日靖国神社例大祭の日陸軍歩兵大佐鈴木秀五郎 1913 年 5 月以降のタロコ蕃討伐作戦記録
	肖像写真 1	木下宇三郎台湾総督参謀長／佐久間総督閣下／平岡茂台湾第一守備隊司令官
	肖像写真 2	小松少佐／大田少佐／鈴木連隊長／久保田少佐／景山少佐／伊藤少佐
	解説	タロコ蕃討伐作戦について　理蕃五ヵ年計画の掉尾を飾る
1	1	1）台湾守備歩兵第一連隊全景
2		2）台湾歩兵第一連隊第三大隊台中兵営
3		3）同上分列式
4		4)五月十七日連隊本部第五、第六中隊台北停車場出発ノ光景
5	2	1)土城陸軍中継倉庫地、土城ハ台中ヨリ埔里社ニ至ル途中ノ一部落ニシテ討伐中此地ニ中継倉庫ヲ置カレタリ、図ハ歩兵第一連隊ノ一部同地ニ到着シ宿営ニ就キツヽアル光景ナリ
6		2)埔理社陸軍倉庫の一部
7		3)大正三年五月二十一日未明歩兵第一連隊ノ主力南投庁埔里社出発蕃地ニ向フ
8		4)埔里社陸軍倉庫ヨリ軍需品発送ノ光景
9	3	1)眉溪中継倉庫ノ全景
10		2)霧社鞍部陸軍倉庫ノ全景
11		3)莿萊山西側陸軍中継地倉庫
12		4)ボアルン陸軍倉庫地
13	4	1)莿萊主山西側中継倉庫地宿泊ノ際ニ於ケルタ餉
14		2)歩兵第一連隊ノ一部莿萊主山南峰登登攀ノ光景
15		3)澎湖島臼砲兵隊莿萊主山南峰難路登攀ノ光景
16		4)莿萊主山南方嶺及パトラン蕃地偵察隊ノ一行
17	5	1)莿萊主山南峰ヨリバトラン蕃地ヲ距テテ花蓮港平野ヲ望ム
18		2)莿萊主山南峰谷間ニ於ケル鈴木隊主力ノ露営地
19		3)莿萊主山南峰ノ深谿
20		4)莿萊主山南峰ノ柘楠花
21	6	1)莿萊主山南峰占領軍隊ノ休憩
22		2)五月二十五日歩兵第一連隊軍旗莿萊主山南峰ニ到着
23		3)莿萊主山南峰ノ幕営作業
24		4)六月三十日鈴木連隊バトラン蕃突入ノ為莿萊主山南峰進発ニ際シ下士団ノ乾杯
25	7	1)莿萊主山南峰ヨリ見タル合歓山方面
26		2)莿萊主山南峰ヨリ見タル能高山方面
27	8	1)五月二十七日歩兵第十一中隊（中隊長井澤大尉）ハ鈴木隊ノ先頭トナリバトラン蕃サカヘン社ニ向ヒ出発時ノ景
28		2)バトラン蕃サカヘン社処置ノ為急進ヲ命ゼラレタル景山大隊長ハ莿萊主山南峰露営ヲ出発シ万難ヲ排シ昼夜兼行シテ目的地ニ向ヒ前進ノ景
29		3)同上　其二
30		4)第二作業隊ノ莿萊主山南峰ヨリサカヘン社ニ至ル間ノ道路作業
31	9	1)莿萊主山南峰付近ノ道路修築
32		2)歩兵ノ道路作業　其一
33		3)歩兵ノ道路作業　其二
34	10	1)木瓜溪陸軍中継倉庫
35		2)バトラン討伐先遣隊題十一中隊ノ苦戦
36		3)サカヘン社攻撃ニ参与ノ為メ急進中ノ第二衛生隊
37		4)サカヘン社付近ニ於ケル第三大隊ノ防禦工事
38	11	1)サカヘン社水源地ヨリ同社蕃屋焼打ノ遠望
39		2)同上　其二
40		3)敵蕃ノ固守セル蕃屋ヲ占領シ火ヲ放ツテ灰燼トナス
41		4)サカヘン社耕作地蹂躙ノ光景
42	12	1)サカヘン社付近苦戦地　其一

写真番号		題辞・写真キャプション等
43		2)同上　其二
44		3)同上　其三
45	13	1)六月六日サカヘン社東方高地付近ニ於テ敵蕃ノ包囲ヲ受ケタル佐藤(覚弥)中尉等ニ応援ノ為将ニ出発セントスル景山大隊ノ一部
46		2)サカヘン社水源地ヨリ蕃屋焼討ノ遠望
47		3)六月六日徳岡中隊及大高将校斥候ト衝突シタルバトラン蕃人追撃
48		4)サカヘン社水源地ニ於ケル臼砲隊ノ砲撃
49	14	1)サカヘン社陣地ニ来襲シタル敵蕃ノ撃攘
50		2)サカヘン社占領地ニ於ケル第二衛生隊繃帯所
51		3)同所内ニ於ケル治療ノ光景
52		4)第二衛生隊収容負傷者後送ノ景
53	15	1)サカヘン社占領後ニ於ケル景山大隊露営地ノ全景
54		2)サカヘン社占領軍隊久振ニテ米飯ヲ喫ス
55		3)サカヘン社ニ於テ糧食欠乏ノ為粟餅搗ノ景
56		4)サカヘン社占領後景山大隊本部幕舎ノ一部
57	16	1)サカヘン社占領部隊ノ陣地付近樹叢伐採作業
58		2)マヘヤン社ヨリ見タル警察隊ノ遠望
59		3)六月十一日景山先遣隊ハサカヘン社陣地ヲ出発シ同日サカヘン高地ヲ占領シ翌十二日朝更ニマヘヤン社占領ノ為高地ヲ出発セントスル光景
60		4)マヘヤン社全景
61	17	1)マンバヤン社ニ於テ蕃屋ヲ利用セル宿舎
62		2)マヘヤン社蕃人ノ拘禁
63		3)マヘヤン社付近ニ於ケル通信隊ノ作業
64		4)サカヘン社及マヘヤン社等ノ降服蕃人ノ一部
65	18	1)マヘヤン社衛生隊繃帯所
66		2)タロコ太山脚木瓜溪上流ペゼリアン溪露営地　其一
67		3)同上　其二
68		4)タロコ太山ヲ超エタロコ蕃地転進ノ鈴木隊前進ニ伴ヒ各梯団間ニ電話線ノ架設ニ従事セル中村通信班ノ主力ベゼリアン溪底ニ休憩ス
69	19	1)バトラン蕃ノ処置ヲ了シバトラン蕃転進ノ前日ニ於ケル軍隊ノ休養
70		2)第二次転進ニ際シバトラン蕃嚮導トシテ配属セラレタルバトラン蕃人
71		3)タロコ太山超越ノ際嚮導トシテ配属セラレタルバトラン蕃人
72		4)鈴木隊ノ先頭梯団ハペゼリアン溪底ヲ出発シタロコ太山ヲ攀ントス
73	20	1)タロコ太山踏破中ノ軍隊ノ先頭
74		2)タロコ太山頂付近ノ露営地
75		3)海抜一万二千尺タロコ太山頂上ニ於ケル鈴木連隊先頭ノ休憩
76	21	1)タロコ太山八合目ヨリ見タル莟莱主山南北両峰
77		2)タロコ太山八合目ヨリ見タルタロコ蕃方面ノ一部
78		3)タロコ太山ヲ越エタル鈴木連隊ノ先頭景山大隊ハ六月十七日タロコ蕃シカヘン社ヲ占領シ休憩ニ移ル
79	22	1)シカヘン社ヨリルツピ社ニ至ル途上ニ於ケルタツキリ溪上流
80		2)ルツピ合流点ニ鈴木連隊本部ノ到着
81		3)ルツピ社及陸軍倉庫ノ全景
82		4)ルツピ社溪底ノ巨石
83	23	1)セラオカフニ南側溪底第一露営地
84		2)セラオカフニ南側溪底第二露営地
85		3)セラオカフニ溪底駐屯軍隊ニ対シ侍従武官若見少将聖旨伝達ノ光景
86		4)セラオカフニ南側溪底露営地ニ於ケル鈴木隊幹部六月二十七日平岡少将到着ニ付爾後鈴木隊ハ同将軍ノ指揮スル所トナル
87	24	1)セラオカフニ南側溪底ニ於テ若見侍従武官同地傷病者慰問
88		2)同所内衛兵所
89		3)同所ニ於ケル通信班ノ作業
90		4)同所渓流架橋作業
91	25	1)セラオカフニ南側溪底第二露営地汲水地ヨリ遙ニ室島山付近蕃社焼払ヲ望ム
92		2)同所ニ於ケル練兵
93		3)同所軍隊炊事

写真番号		題辞・写真キャプション等
94		4)同所兵士ノ粟搗
95	26	1)セラオカフニ社ニ於ケル第二衛生隊並ニ患者後送
96		2)同所幕営生活
97		3)同所溪底ニ於ケル水浴
98		4)同軍陣中ノ娯楽
99	27	1)セラオカフニ社南側溪底第二露営地ニ於ケル軍需品輸送人夫
100		2)七月三日平岡隊ハ第二次行動計画ニ基キ第一線ニ参加ノ為メセラオカフニ南側溪底ヲ出発ス
101		3)同隊ソワサツ合流点ニ向フ行軍途上ノ光景　其一
102		4)同上　其二
103	28	1)ソワサツ合流点倉庫全景
104		2)饅頭山下水源地
105		3)饅頭山付近ノ滝
106	29	1)饅頭山下露営地
107		2)ラビット溪底露営地ノ一部
108		3)ラビット合流点溪底露営地ニ於ケル平岡隊司令部ノ一部
109	30	1)七月七日ラビット合流点溪底出水時露営地ノ混雑
110		2)同所溪底ニ於テ軍需品綱渡シノ景　其一
111		3)同上　其二
112		4)三角錐山西麓倉庫
113	31	1)平岡少将ハムクシイバウ社付近ノ蕃人討伐計画ノ為谷隊長ヲ呼ビパパカ社付近ニ到リ地形ノ偵察ヲナス
114		2)パパカ社北方高地砲兵陣地ニ於テ平岡少将ムクシイバウ社討伐ニ関スル命令ヲ部下ニ与フ
115		3)ムクシイバウ社占領当時蕃屋ノ焼払
116		4)パパカ社倉庫
117	32	1)パパカ社付近ヨリムクシイバウ社攻撃ニ際シ平岡少将諸隊指揮ノ状
118		2)焼払後ニ於ケルムクシイバウ社　其一
119		3)同上　其二
120		4)ムクシイバウ社付近残部ノ撃攘
121	33	1)松山稜ヨリ南湖大山及タウサウ方面ヲ望ム
122		2)同所ニ於テ蕃人ト旗信号ヲナス
123		3)同所ヨリ見タル中央突山
124		4)同所ヨリ見タルタウサイ蕃地ノ遠望
125	34	1)松山稜ニ於ケル帰順蕃人ニ対シ平岡少将ノ訓示　七月十一日以来平岡隊ノ猛烈勇敢ナル攻撃ヲ受ケタルタウサイ溪上流内タロコ蕃ハ軍隊ノ威力ト饑餓トノ為メ遂ニ抵抗ヲ断念シ続々投降ス
126		2)松山稜ニ於ケル平岡隊司令部、鈴木連隊本部幕営並ニ三角錐山ノ遠望
127		3)同稜ニ於ケル臼砲隊
128		4)投降帰順ヲ許サレ之レガ証トシテ帰順旗ヲ受ケ欣然トシテ社ノ途ニ就ク
129	35	1)蕃人帰順ノ為メ松山稜ニ来ル　其一
130		2)同上　其二
131		3)蕃人銃器提出
132		4)押収銃器
133	36	1)押収銃器ノ代価ヲ支払ヒ帰順勧告ノ為メ奔走シタル蕃人ニ対シ報酬トシテ金品ヲ恵与ス
134		2)松山稜ニ於ケル帰順蕃人ニ対シ鈴木連隊長ノ訓示
135		3)八月松山稜ニ於テ始メテ慰問袋分配ノ景
136		4)帰順蕃人ニ対シテ毛糸、塩物、酒、米、ブリキ空缶等ヲ給与ス
137	37	1)松山稜ニ於ケル平岡隊司令部要員
138		2)松山稜ニ於ケル帰順蕃婦ノ舞踊
139		3)タロコ蕃婦
140	38	1)松山稜ニ於ケル溪頂蕃人及タウサイ蕃人
141		2)滞在ヲ利用シ兵器ヲ修理ス
142		3)八月十一日平岡隊司令部松山稜ヲ去リ帰還ノ途ニ就ク
143		4)同十二日凱旋ノ途ニ就ク歩兵第一連隊軍旗
144	39	1)風土病ニ罹レル蕃人
145		2)ムクシバ一露営地

写真番号		題辞・写真キャプション等
146		3)富田山及塔山　図中(A)ハ七月三十日太田隊ノダオラス社攻撃ニ際シ第二中隊付富田中尉名誉戦死ヲ遂ケタル地ナリ故ニ富田山ト命名サル　(B)ハ塔山ニシテ海抜八千余尺近ク花蓮塔ヲ脚下ニ望ム
147	40	1)七月二日タウシク社攻撃ノ際太田大隊第二中隊ノ一部戦闘ノ光景
148		2)六月二十九日同隊ムカカロ社攻撃ノ際蕃社突入前ノ前進
149		3)六月三十日太田隊第一中隊ダオラス南方高地ニ於テ敵蕃ト衝突シ激戦ノ光景
150	41	1)六月三十日太田大隊第二中隊富田山避難蕃屋包囲攻撃ノ光景
151		2)六月三十日第一中隊富田山ニ於テ敵蕃ヲ撃攘シ蕃社ニ突撃ノ光景
152		3)第一大隊機関銃
153		4)ムクシンウウ社ニ於ケル外衛兵
154	42	1)ムクシクバウ太田大隊幕営地　其一
155		2)同上　其二
156		3)ムクシクバウ社付近通信隊ノ作業
157		4)ムクシクバウ社ニ於ケル太田大隊将校、同相当官及仮帰順蕃人
158	43	1)七月十六日ムクトロワン社ニ向ツテ伊澤中隊ノ前進
159		2)ムクトロワン社付近ニ於ケル帰順蕃人
160		3)同社付近松山中隊前進
161	44	1)松山中隊ムクトロワン社ニ向ヒ前進
162		2)同中隊ノムクトロワン社付近ニ於ケル戦闘
163		3)松山中隊戦闘ノ光景
164		4)ムクトロワン社ニ於ケル衛生隊ノ患者輸送
165	45	1)景山大隊露営地ニ於ケル小西中隊ノ展望哨
166		2)ムクシラオ社西方渓谷蕃社攻撃ニ於ケル第三大隊長景山少佐ノ率イル諸隊敵蕃ヲ撃破シ蕃屋内ニ突入シテ之レヲ焼却セリ
167		3)蕃屋灰燼トナル　ムクシラオ社占領後蕃屋ヲ焼却ス
168	46	1)ムクシラオ社蕃人我機関銃ニ驚ク
169		2)同社ニ於ケル景山大隊帰順蕃人
170		3)同所ニ於ケル蕃人訓示場
171		4)同所露営地ノ全景
172	47	1)ムクシラオ社露営地ニ於ケル器械体操場
173		2)同地ニ於ケル景山大隊本部将校及蕃人
174		3)同地付近ニ於ケル景山大隊難路通過
175	48	1)ムクシラオ社付近ニ於ケル景山大隊ノ断崖登攀
176		2)七軒蕃社占領ノ為メ前進中ノ有馬中隊　其一
177		3)同上　其二
178	49	1)ソワツサル社付近ニ於ケルタウサイ溪及無名溪(源ハ中央突山南麓ニ発ス)合流点
179		2)同地ニ於ケル有馬中隊ノ露営地　其一
180		3)同上　其二
181	50	1)ラビット合流点ニ於ケル鉄線橋
182		2)ルッピノ鉄線橋
183		3)合歓山付近無名溪陸軍倉庫
184	51	1)畢禄山ノ遠望
185		2)北合歓山
186		3)関ヶ原ヨリ見タル合歓山
187		4)関ヶ原ノ鉄線橋
188	52	1)関ヶ原　往昔トロツク蕃及タロコ蕃ノ雌雄ヲ決セシ古戦場ナリ、ユエニ今回ノ討伐ニ於テ此名ヲ付ス合歓山ノ直下ニ在リテ地域広闊蕃界ニ見ル能ハザル地形ナリ
189		2)関ヶ原陸軍倉庫
190		3)関ヶ原幕営地ノ一部
191	53	1)合歓山無線通信所　今回ノ討伐のため設置
192		2)合歓山無線通信所内部
193		3)合歓山ニ於ケル歩兵第一連隊本部将校
194		4)合歓山通過ノ軍旗
195	54	1)八月十六日帰還行軍途中合歓山上歩兵隊ノ休憩
196		2)同日合歓山ニ於ケル臼砲隊ノ帰還行軍
197		3)合歓山上輸送隊ノ行軍

写真番号		題辞・写真キャプション等
198		4)討伐行動終了時ニ於ケル南投庁埔里社支庁霧社鞍部陸軍倉庫跡地
199	55	1)八月十八日歩兵第一連隊帰還ノ途次眉溪ヲ通過ス
200		2)八月十八日歩兵第一連隊埔里社ニ凱旋ス
201		3)埔里社陸軍病院
202		4)埔里社陸軍病院ノ傷病者
203	56	1)南投庁亀仔頭廠舎
204		2)八月二十二日歩兵第一連隊台中ニ凱旋
205		3)八月二十三日凱旋部隊新竹ヲ通過ス
206		4)八月二十三日歩兵第一連隊軍旗台北ニ凱旋ス
207	57	1)八月二十一日台湾総督佐久間閣下台北ニ凱旋ス
208		2)八月二十三日歩兵第一連隊本部台北ニ凱旋ス
209		3)台北衛戍病院
210		4)同院病室
211	58	1)台北ニ於ケル討蕃隊戦病死者招魂祭祭場
212		2)佐久間総督参拝
213		3)平岡第一守備隊司令官弔文朗読
214		4)軍隊ノ参拝
215	59	1)台北ニ於ケル討蕃隊凱旋祝賀提灯行列ノ光景　其一
216		2)同上　其二
217		3)同凱旋祝賀会表門
218		4)同上式場
219	60	1)凱旋祝賀会余興　其一
220		2)同上　其二
221		3)同上　其三
222		4)同上　其四
223	61	1)台中公園　其一
224		2)同上　其二
225		3)同兵営全景
226	62	1)台湾神社
227		2)同神社前明治橋
228		3)在台北台湾総督官邸
229	63	1)台北城内市街ノ一部
230		2)台北新公園
231		3)台北三線道路
232		4)台北大稲呈市街
233	64	1)台北水道水源地
234		2)苗圃内台北公園ノ一部
235		3)台北北投公園　其一
236		4)同上　其二
	奥付	大正三年十一月廿五日印刷 大正三年十一月三十一日(ママ)発行 著作者兼発行者 台北新起横街二丁目十番戸　柴辻誠太郎 台北城内府前街三丁目十一番地　遠藤克己 印刷者　台北新起横街二丁目十番戸　柴辻誠太郎 印刷所　台北城内西門街四十七番戸　株式会社台湾日日新報社 発行所　台北城内西門街四十七番戸　株式会社台湾日日新報社 台北城内府前街三丁目十五番戸　遠藤写真館 発売所　台北城内西門街四十七番戸　株式会社台湾日日新報社 台北城内府前街三丁目十五番戸　遠藤写真館